

現代の日展作家たち — 日本の美

2018

NITTEN Artists Today: The Beauty of Japan



鈴木竹柏 「霧霽れる」 2018年

2020年に向けて、新たな一歩を

日展は、明治四十年の文部省美術展覧会（文展）から数えて今年111年を迎えます。

2013年以降、日展は厳しい改革を進めてまいりました。昨年は、110年という大きな節目を迎え、過去の業績を振り返りながら、さらなる発展へ向けての契機となりました。この間試練を乗り越えてこられましたのも、過去に大きく貢献し、地盤を築いてくださった数多くの作家の方々の残された有形、無形の遺産と力のおかげであり、改めて、支えられ守られていることに大きな感謝を感じた一年でした。

今年は、改革から5年目となります。改革によって組織をシンプルにし、より開かれた形で審査を行うこととさせていただきました。ただ、何よりも、作家集団である日展は、作品で皆様にお応えしたいと考え、一層真剣に作品づくりに取り組んでまいりました。現在、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五部門にわたり、全国で一万一千人を超える応募者が活動しています。その中から入選した約2200点と、長年の努力が認められ会員や準会員となっている作家の作品、前年に特選を受賞した無鑑査作品と合わせて約3000点の作品が一堂に会します。このような、五科そろったの大規模な公募展は世界に類がなく、スケールの大きな展覧会となっております。

近年、団体展離れが問われていますが、日展は若い方々が日展に入って良かったと思えるような体制づくりを進めております。十代から100歳まで、さまざまな作家が同じ立場で一年に一度、その作品を発表し合います。作品が同じ会場に並び、皆様にご覧いただき、評価をいただくことが作家にとっては大きな励み

ともなっています。またさまざまな面で孤独との闘いでもある作家活動がより充実し、高みに進んでいけるよう進めております。

2020年にはいよいよ東京オリンピックの開催も控えており、文化面でも国際的な交流の必要性を重く感じております。作家が、より広い世界へ羽ばたいていけるよう、日展では、今年から会場内での作品撮影を一定の条件のもとで行っていただけるようにいたしますので、ご覧になった皆さまからも発信していただいて親しく交流、鑑賞いただけたらありがたいと考えております。

日展は常に高い次元を目指す作家集団として、切磋琢磨し、より優れた日本の現代の美術作品を、国内だけでなく世界へ発表していく、そうした視点で真摯に取り組んでまいりたいと考えております。ぜひ、多くの皆様にご高覧いただきご講評をいただくことで、作家一同精進してまいりたいと存じます。今後もより一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。



公益社団法人 日展理事長
奥田小由女

日本画

自然に学び内なる世界を描く

鈴木竹柏

Takekazu Suzuki

洋画

「祈り」のテーマを深める

藤森兼明

Kanameji Takanori

彫刻

具象彫刻で人間そのものを表現

蛭田二郎

Jiro Hironaka

工芸美術

土と生きたモチーフとの競演

今井政之

Masayuki Imai

書

命の断層を書く

新井光風

Mitsukazu Arai

日本画

抽象的な画面に具象を入れる

西田真人

Shinjiro Nishida

洋画

木版画で表現する喜び

田中里奈

Rina Tanaka

彫刻

井波彫刻の工房に七年間学ぶ

岡本和弘

Kazuhiko Okamoto

工芸美術

身近なモチーフをオリジナルの友禅染で制作

上原利丸

Takanari Uehara

書

文房四宝の精神を大切に

伊藤一翔

Yoshio Ito



日展の顧問・理事・監事紹介

平成30年8月1日現在

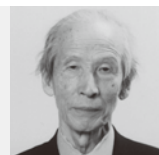


岩倉 寿
いづくら しゅじ
日本画 顧問

1936年、香川県生まれ。山口華楊に師事。1959年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科卒業。1961年、同大学専攻科修了。1958年、第1回日展初入選。1972年、第4回日展「柳図」により特選受賞。1976年、第8回日展「山里」により特選受賞。1988年、第20回日展「沼」により日展会員賞受賞。1990年、第22回日展「晩夏」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第34回日展出品作「南の窓」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「鳥来るころ」 改組新第4回日展



鈴木 竹柏
すずき ちくはく
日本画 顧問

1918年、神奈川県生まれ。中村岳陵に師事。1936年、逗子開成中学校卒業。1943年、第6回新文展初入選。1956年、第12回日展「暮色」により特選・白寿賞受賞。1958年、第1回日展「山」により特選・白寿賞受賞。1962年、第5回日展「干潮」により菊華賞受賞。1981年、第13回日展「丘」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「気」により日本芸術院賞受賞。1994年、勲三等瑞宝章受章。1995年、日展事務局長。1997年、日展理事長。2007年、文化功労者。2009年、日展会長。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「雨」 改組新第4回日展



川崎 春彦
かわさき はるひこ
日本画 顧問

1929年、東京都生まれ。父は川崎小虎、父と義兄の東山魁夷に師事。1950年、東京藝術大学日本画科卒業。同年、第6回日展初入選。1961年、第4回日展「風の森」により特選・白寿賞受賞。1964年、第7回日展「孤島」により特選・白寿賞受賞。1983年、第15回日展「野」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「朝明けの湖」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2018年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



「富士」 第43回日展



土屋 禮一
つちや れいいち
日本画 副理事長 事務局長

1946年、岐阜県生まれ。加藤東一に師事。1967年、武蔵野美術大学実技専修科日本画卒業。同年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「水たまり」により特選・白寿賞受賞。1976年、第8回日展「暮れて行く」により特選受賞。1985年、第17回日展「隠岐」により日展会員賞受賞。2005年、第37回日展「椿樹」により文部科学大臣賞受賞。2007年、第38回日展出品作「軍鶏」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長 事務局長、日本芸術院会員、金沢美術工芸大学名誉教授。



「雄飛」 改組新第4回日展



山崎 隆夫
やまざき たかお
日本画 理事

1940年、新潟県生まれ。下保昭に師事。1967年、京都教育大学特修美術日本画専攻科卒業。1965年、第8回日展初入選。1972年、第4回日展「森」により特選受賞。1973年、第5回日展「トマト」により無鑑査・特選受賞。1992年、第24回日展「海游」により日展会員賞受賞。2008年、第40回日展「沼宴」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「海煌」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。



「雲映ゆら」 改組新第4回日展



福田 千恵
ふくだ せんけい
日本画 理事

1946年、東京都生まれ。佐藤太清に師事。1969年、武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。同年、改組第1回日展初入選。1981年、第13回日展「紫陽花とテレサ」により特選受賞。1984年、第16回日展「単衣の女」により特選受賞。1996年、第28回日展「刀匠」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「ながい夜」により文部大臣賞受賞。2006年、第37回日展出品作「ピアノスト」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



「アントワネット」 改組新第4回日展



渡辺 信喜
わたなべ のぶよし
日本画 理事

1941年、京都府生まれ。山口華楊に師事。1964年、京都市立美術大学(現・京都市立芸術大学)日本画科卒業。同年、第7回日展初入選。1971年、第3回日展「林檎」により特選受賞。1984年、第16回日展「林檎」により特選受賞。2015年、改組新第2回日展「夏草」により内閣総理大臣賞受賞。現在、日展理事、京都精華大学名誉教授。



「花菖蒲」 改組新第4回日展

1955年、静岡県生まれ。坪内正、伊藤清永、中山忠彦に師事。1979年、多摩美術大学油画科卒業。1983年、第15回日展初入選。1990年、第22回日展「悠想」により特選受賞。1998年、第30回日展「想春」により特選受賞。2004年、第36回日展「爽秋」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「L'allure(ラリユール)」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組 新 第3回日展出品作「l'Aube(夜明け)」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



湯山 俊久
ゆやま としひさ
洋画 理事



「二人」
改組 新 第4回日展

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレション パンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレション サンピターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。



藤森 兼明
ふじもり かねあき
洋画 副理事長



「ミッドバル マニスクリプトへのオマージュ」
改組 新 第4回日展

1931年、東京都生まれ。斎藤素蔵、平野敬吉、進藤武松に師事。1961年、第4回日展初入選。1964年、第7回日展「暖流」により特選受賞。1993年、第25回日展「未来への讃歌」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「大地」により日本芸術院賞受賞。2007年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



川崎 普照
かわさき ひろてる
彫刻 顧問



「晩秋」
改組 新 第4回日展

1931年、東京都生まれ。父の雨宮治郎に師事。日本大学芸術学部卒業。1956年、第12回日展初入選。1958年、第1回日展「薫風に望む」により特選受賞。1963年、第6回日展「新世代」により特選受賞。1985年、第17回日展「道」により内閣総理大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「想秋」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。同年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



雨宮 敬子
あめのみや けいこ
彫刻 顧問



「思索平成」
改組 新 第4回日展

1944年、大分県生まれ。江藤哲に師事。1966年、大分大学学芸学部美術科卒業。1975年、第7回日展初入選。1982年、第14回日展「紫陽花の頃」により特選受賞。1993年、第25回日展「黒衣」により特選受賞。2009年、第41回日展「ひととき」により文部科学大臣賞受賞。2013年、第44回日展出品作「夏の終りに」により日本芸院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、東光会理事長。



佐藤 哲
さいとう いてつ
洋画 理事



「冬の陽」
改組 新 第4回日展

1938年、埼玉県生まれ。渡邊武夫に師事。1961年、埼玉大学教育学部美術科卒業。同年、第4回日展初入選。1987年、第19回日展「鉱山寥乎」により特選受賞。1992年、第24回日展「雪の選炭工場」により特選受賞。2015年、改組 新 第2回日展「北海の岬」により内閣総理大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「古潭風声」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



根岸 右司
ねぎし ゆうじ
洋画 理事



「最果の旅」
改組 新 第4回日展

1933年、広島県生まれ。1956年、愛媛大学教育学部美術科卒業。1954年、第10回日展初入選。1962年、第5回日展「カニのある静物」により特選受賞。1986年、第18回日展「レリーフのある棚」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展「デルフォイへの道」により文部科学大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「アクロポリスへの道」により日本芸術院賞受賞。2009年、日展事務局長。2013年、日展理事長。現在、日展顧問、日本芸術院会員、光風会理事長、山梨大学名誉教授。



寺坂 公雄
てらさか たかお
洋画 顧問



「山麓冬木立」
改組 新 第4回日展

1935年、福岡県生まれ。伊藤清永に師事。1954年、第10回日展初入選。1969年、改組第1回日展「椅子に倚る」により特選受賞。1981年、第13回日展「縞衣」により特選受賞。1990年、第22回日展「青衣」により日展会員賞受賞。1996年、第28回日展「華粧」により内閣総理大臣賞受賞。1998年、第29回日展出品作「黒扇」により日本芸術院賞受賞。2001年、日展事務局長。2009年、日展理事長。現在、日展理事、日本芸術院会員、白日会会長。



中山 忠彦
なかやま ただこ
洋画 理事



「私とは誰か？」
改組 新 第4回日展

1941年、京都府生まれ。松田尚之に師事。1968年、金沢美術工芸大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1973年、第5回日展「風のよそおい」により特選受賞。1974年、第6回日展「風の中を」により無鑑査・特選受賞。2005年、第37回日展「はんなりと石庭に」により内閣総理大臣賞受賞。2009年、第40回日展出品作「源氏物語絵巻に想う」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大阪成蹊短期大学名誉教授。



彫刻 理事
宮瀬 富之
みやせ とみゆき



「流雲」 改組新第4回日展

1941年、東京都生まれ。小森邦夫に師事。1964年、茨城大学教育学部美術科卒業。1962年、第5回日展初入選。1969年、改組第1回日展「窮」により特選受賞。1971年、第3回日展「省」により特選受賞。1990年、第22回日展「五月の女」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「悠久の時」により文部大臣賞受賞。2005年、第36回日展出品作「慈愛—こもれび」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員。



彫刻 理事
能島 征二
のうじま せいじ



「永久に」 改組新第4回日展

1930年、東京都生まれ。平櫛田中、澤田政廣、圓錐勝三に師事。1953年、東京藝術大学彫刻科卒業。1954年、第10回日展初入選。1966年、第9回日展「弧」により特選受賞。1970年、第2回日展「薫風」により特選受賞。1992年、第24回日展「清冽」により文部大臣賞受賞。1996年、第27回日展出品作「竹園生」により日本芸術院賞受賞。1999年、日展事務局長。2000年、日展理事長。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員、東京学芸大学名誉教授。



彫刻 顧問
橋本 堅太郎
はしもと けんたろう



「長崎」 改組新第4回日展

1926年、三重県生まれ。東京高等師範学校卒業。1950年、第6回日展初入選。1967年、第10回日展「華の譜」により特選受賞。1968年、第11回日展「想華の詞」により無鑑査・特選受賞。1969年、改組第1回日展「宴の華」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「星のいのり」により日展会員賞受賞。1984年、第16回日展「焦躁の旅路」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「朝の祈り」により日本芸術院賞受賞。1996年、中村晋也美術館を設立。1999年、勲三等旭日中綬章受章。2002年、文化功労者。2007年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、鹿児島大学名誉教授、筑波大学名誉博士。



彫刻 顧問
中村 晋也
なかむら しんや



「片倉小十郎景観公」 改組新第4回日展

1939年、愛知県生まれ。1963年、東京教育大学（現・筑波大学）教育学専攻科卒業。1962年、第5回日展初入選。1972年、第4回日展「生きがい」により特選受賞。1980年、第12回日展「ひたむき」により特選受賞。1992年、第24回日展「いい日」により日展会員賞受賞。1999年、第31回日展「森からの声」により内閣総理大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「生生流転」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、名古屋市立大学名誉教授。



彫刻 理事
山本 眞輔
やまもと しんぺい



「心の旅—風に折りて—」 改組新第4回日展

1943年、広島県生まれ。1966年、明治大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1987年、第19回日展「雄」により特選受賞。1990年、第22回日展「若人」により特選受賞。2012年、第44回日展「こもれび」により文部科学大臣賞受賞。2016年、改組新第2回日展出品作「朝の響き」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



彫刻 理事
山田 朝彦
やまだ あさひこ



「一歩」 改組新第4回日展

1944年、岐阜県生まれ。清水多嘉示、木下繁に師事。1967年、武蔵野美術大学造形学部卒業。1968年、第11回日展初入選。1976年、第8回日展「裸婦」により特選受賞。1978年、第10回日展「裸婦」により特選受賞。2006年、第38回日展「長風」により文部科学大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「朝」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、日本彫刻会理事長、名古屋芸術大学名誉教授。



彫刻 副理事長
神戸 峰男
かんべ みねお



「朝」 改組新第4回日展

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒業。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女'68」により菊花賞受賞。1996年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知-2001-」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授。



彫刻 顧問
蛭田 二郎
ひらた じろう



「長い髪の母子像」 改組新第4回日展

1936年、大阪府生まれ。1967年、第10回日展初入選。1972年、第4回日展「或るページ」により特選受賞。1974年、第6回日展「風」により特選受賞。1988年、第20回日展「海の詩」により文部大臣賞受賞。1990年、第21回日展出品作「炎心」により日本芸術院賞受賞。2006年、奥田元宋・小由女美術館開館。2008年、文化功労者。2013年、日展事務局長。2014年、日展理事長。現在、日展理事長、日本芸術院会員。



奥田 小由女
おくだ さゆめ
工芸美術 理事長



「海からの土地」 改組新第4回日展

1934年、京都府生まれ。1958年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）卒業。1960年、同大学専攻科修了。1957年、第13回日展初入選。1960年、第3回日展「青釉花器」により特選・北斗賞受賞。1966年、第9回日展「花器『藍』」により特選・北斗賞受賞。2007年、第38回日展出品作「扁壺『大地』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



森野 泰明
もりの たいめい
工芸美術 顧問



「赫鏤『秋の調べ』」 改組新第4回日展

1930年、大阪府生まれ。楠部彌弼に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展「焼〆『盤』」により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展「『泥彩』壺」により特選・北斗賞受賞。1998年、「赫窯 雙蟹」により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



今井 政之
いまい まさゆき
工芸美術 顧問



「壺窯五色海老壺」 改組新第4回日展

1930年、京都府生まれ。山崎覚太郎に師事。1953年、京都市立日吉ヶ丘高等学校美術工芸コース漆芸科卒業。同年、第9回日展初入選。1966年、第9回日展「刻象“大地”その内なるもの」により特選・北斗賞受賞。1968年、第11回日展「燦光」により特選・北斗賞受賞。1983年、第15回日展「収穫」により日展会員賞受賞。2004年、第35回日展出品作「スサノオ聚抄」により日本芸術院賞受賞。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



伊藤 裕司
いわた ゆじ
工芸美術 顧問



「大伯星女」 改組新第4回日展

1945年、長野県生まれ。蓮田修吾郎に師事。1971年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1977年、第9回日展初入選。1979年、第11回日展「四角柱イン・セクション」により特選受賞。1984年、第16回日展「無限標」により特選受賞。2000年、第32回日展「風の門」により文部大臣賞受賞。2004年、横浜美術短期大学（現・横浜美術大学）学長。2016年、改組新第2回日展出品作「宙の河」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、横浜美術大学名誉教授。



春山 文典
はるやま ふみのり
工芸美術 理事



「宙の河」 改組新第4回日展

1940年、石川県生まれ。金沢美術工芸大学卒業。1963年、第6回日展初入選。1980年、第12回日展「容」により特選受賞。1986年、第18回日展「蒼い花器」により特選受賞。2001年、第33回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2010年、第41回日展出品作「湖畔・彩釉花器」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本芸術院会員、金沢学院大学名誉教授。



武腰 敏昭
たけし としあき
工芸美術 理事



「無鉛釉上絵染付『朝』」 改組新第4回日展

1932年、京都府生まれ。1954年、京都市立美術大学（現・京都市立芸術大学）工芸科卒業。1956年、同大学専攻科修了。1953年、第9回日展初入選。1969年、改組第1回日展「集積」により特選・北斗賞受賞。1977年、第9回日展「間の実在」により特選受賞。1990年、第22回日展「巨木積雪」により文部大臣賞受賞。1993年、第23回日展出品作「原生雨林」により日本芸術院賞受賞。2017年、旭日中綬章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、京都市立芸術大学名誉教授。

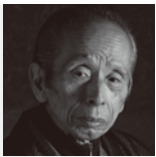


中井 貞次
なかいていじ
工芸美術 顧問



「風景回廊」 改組新第4回日展

1927年、石川県生まれ。1949年、東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科卒業。1950年、第6回日展初入選。1956年、第12回日展「『風寒し』青釉花器」により北斗賞受賞。1957年、第13回日展「『鶏』緑釉壺」により特選・北斗賞受賞。1961年、第4回日展「釉彩『魚紋』花器」により特選・北斗賞受賞。1982年、第14回日展「『歩いた道』花器」により文部大臣賞受賞。1985年、第16回日展出品作「『峠つ』花三島飾壺」により日本芸術院賞受賞。2004年、文化功労者。2008年、金沢学院大学副学長。2011年、文化勲章受章。現在、日展顧問、日本芸術院会員、現代工芸美術家協会理事長。

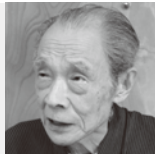


大樋 年朗
おおひ としろう
工芸美術 顧問



「黒陶幾何紋花器」 改組新第4回日展

1928年、京都府生まれ。父の日比野五鳳に師事。同志社大学卒業。1967年、第10回日展初入選。1975年、第7回日展「春」により特選受賞。1978年、第10回日展「春」により特選受賞。1987年、第19回日展「天の海」により日展会員賞受賞。1997年、第29回日展「三日月」により内閣総理大臣賞受賞。1999年、第30回日展出品作「花」により日本芸術院賞受賞。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。



書 顧問
日比野 光鳳
ひびの こうほう



「大和こころ」改組新第4回日展

1924年、東京都生まれ。川口芝香に師事。1961年、第4回日展初入選。1979年、第11回日展「うなる子」により特選受賞。1981年、第13回日展「早春」により特選受賞。1996年、第28回日展「花」により日展会員賞受賞。2009年、第40回日展出品作「更級日記抄」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



書 顧問
小山 やす子
こやま やすこ



「新古今和歌のけしき」改組新第4回日展

1943年、山口県生まれ。1969年、東京藝術大学大学院美術研究科修了。1975年、第7回日展初入選。1983年、第15回日展「夜明け」により特選受賞。1985年、第17回日展「曜」により特選受賞。1996年、第28回日展「萩釉広口陶壺『ある光景の印象』」により文部大臣賞受賞。2000年、第31回日展出品作「萩釉広口陶壺『曜'99・海』」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、山口大学名誉教授。



工芸美術 理事
吉賀 将夫
よしかは たかお



「萩釉陶壺『動』」改組新第4回日展

1949年、東京都生まれ。祖父の三田村自芳、父の三田村秀芳、高橋節郎、田口善国に師事。1973年、東京学芸大学教育学部美術科(工芸専攻)卒業。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科(漆芸専攻)修了。1973年、第5回日展初入選。1975年、東京藝術大学大学院美術研究科(漆芸専攻)修了。1985年、第17回日展「ピラミス・遙か天空に」により特選受賞。1988年、第20回日展「ピラミス・嵩峻」により特選受賞。2014年、改組新第1回日展「炎立つ」により日展会員賞受賞。2016年、改組新第3回日展「月の光 その先に」により内閣総理大臣賞受賞。2018年、改組新第3回日展出品作「月の光 その先に」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、東京藝術大学名誉教授。



工芸美術 理事
三田村 有純
みたむらありすみ



「島にかかる赤い月」改組新第4回日展

1936年、兵庫県生まれ。深山龍洞に師事。1961年、京都学芸大学(現・京都教育大学)美術科書道卒業。同年、第4回日展初入選。1977年、第9回日展「梅」により特選受賞。1979年、第11回日展「富士山」により特選受賞。1993年、第25回日展「無常」により日展会員賞受賞。2001年、第33回日展出品作「清流」により内閣総理大臣賞受賞。2003年、第33回日展出品作「清流」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員、京都教育大学名誉教授。



書 副理事長
井茂 圭洞
いしげ けいどう



「八田若郎女をおもう歌」改組新第4回日展

1937年、東京都生まれ。西川寧に師事。1966年、第9回日展初入選。1972年、第4回日展「九穀斯豊」により特選受賞。1978年、第10回日展「熱鐵」により特選受賞。1994年、第26回日展「雲龍風虎」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「盛稲梁」により文部大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「明且鮮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大東文化大学名誉教授。



書 理事
新井 光風
あらい みつはる



「融雪」改組新第4回日展

1924年、京都府生まれ。廣津雲仙、辻本史邑に師事。1954年、第10回日展初入選。1963年、第6回日展「陸游の詩」により特選・苞竹賞受賞。1970年、第2回日展「高青邱詩 送陳少府赴嘉定」により菊花賞受賞。1981年、第13回日展「竹窓」により日展会員賞受賞。1986年、第18回日展「高青邱詩」により文部大臣賞受賞。1993年、第24回日展出品作「杜少陵詩」により日本芸術院賞受賞。2016年、文化功労者。現在、日展顧問。



書 顧問
尾崎 邑鵬
おさき ゆうほう



「運籌策」改組新第4回日展

1949年、東京都生まれ。高橋節郎に師事。1973年、東京藝術大学工芸科卒業。1977年、東京藝術大学大学院美術研究科(漆芸専攻)修了。同年、第9回日展初入選。1987年、第19回日展「水の香」により特選受賞。1991年、第23回日展「時の流れに」により特選受賞。2006年、第38回日展「潮の紋」により文部科学大臣賞受賞。現在、日展監事。



工芸美術 監事
並木 恒延
なみき つねのぶ



「雲の旅」改組新第4回日展

作家インタビュー集

Interviews of artists

芸術とは何か
創作とは何か

1949年、岡山県生まれ。青山杉雨、成瀬映山に師事。1973年、大東文化大学卒業。1974年、第6回日展初入選。1989年、第21回日展「天馬」により特選受賞。1993年、第25回日展「建始」により特選受賞。2006年、第38回日展「協穆」により日展会員賞受賞。2015年、改組 新 第2回日展「駿歩」により文部科学大臣賞受賞。2017年、改組 新 第3回日展出品作「協戮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大東文化大学教授、謹慎書道会理事長、公益財団法人全国書美術振興会理事長。



高木聖雨
たかきせい
書 理事

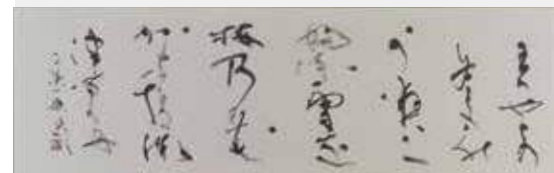


「柔機」
改組 新 第4回日展

1947年、兵庫県生まれ。西谷卯木に師事。1969年、改組第1回日展初入選。1986年、第18回日展「山里」により特選受賞。1990年、第22回日展「ふじの雪」により特選受賞。2003年、第35回日展「深雪」により日展会員賞受賞。2009年、第41回日展「静寂」により内閣総理大臣賞受賞。2011年、第42回日展出品作「小倉山」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、日本書芸院理事長。



黒田賢一
くろだ けんいち
書 理事

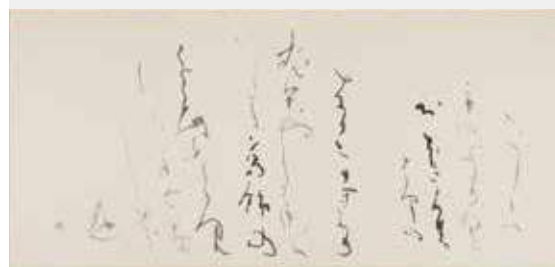


「梅の花」
改組 新 第4回日展

1956年、千葉県生まれ。日比野五鳳、日比野光鳳に師事。1979年、東京学芸大学書道科卒業。1980年、東京学芸大学専攻科(書道)修了。同年、第12回日展初入選。1992年、第24回日展「雪」により特選受賞。1998年、第30回日展「タされば」により特選受賞。2008年、第40回日展「良寛春秋」により日展会員賞受賞。2016年、改組 新 第3回日展出品作「墨染」により内閣総理大臣賞。2018年、改組 新 第4回日展出品作「かつしかの里」により日本芸術院賞受賞。現在、日展監事。



土橋靖子
つちはし やすこ
書 監事



「かつしかの里」
改組 新 第4回日展

1944年、栃木県生まれ。浅香鉄心に師事。1967年、立正大学卒業。1975年、第7回日展初入選。1990年、第22回日展「蘇東坡詩」により特選受賞。1992年、第24回日展「曾鞏詩」により特選受賞。2007年、第39回日展「李濂詩」により日展会員賞受賞。2010年、第42回日展「小学之一文」により文部科学大臣賞受賞。2012年、第43回日展出品作「李頎詩 贈張旭」により日本芸術院賞受賞。現在、日展理事。



星弘道
ほし ひろち
書 理事



「劉公詩」
改組 新 第4回日展

鈴木竹柏

逗子駅から車で十五分ほど、葉山町の住宅街から続く小高い山の急な坂を登り切ったところに木々に囲まれた瀟洒なアトリエの建物が見えてくる。訪問した六月下旬は、まさに薄紫の紫陽花が道沿いにずっと咲き誇っていた。明るい日差しが射し込む応接間にお通しいただく。部屋の大きな窓の外は緑が見えないほど自然豊かな場所である。ほどなく百歳を迎える日本画家鈴木竹柏氏が現れた。

Profile

1918年、神奈川県生まれ。中村岳陵に師事。1936年、逗子開成中学校卒。1943年、第6回新文展初入選。1956年、第12回日展「暮色」により特選・白寿賞受賞。1958年、第1回日展「山」により特選・白寿賞受賞。1962年、第5回日展「干潮」により菊華賞受賞。1981年、第13回日展「丘」により文部大臣賞受賞。1988年、第19回日展出品作「気」により日本芸術院賞受賞。1994年、勲三等瑞宝章受章。1995年、日展事務局長。1997年、日展理事長。2007年、文化功労者。2009年、日展会長。現在、日展顧問、日本藝術院会員。

白寿記念展で三十点を展示

「朝起きるとすぐに筆をとります。画室にこもり、食事の前の二時間が一番頭がさえていいんです。絵具を溶くところも自分でやります。人にはやらせません」

今も昔と同じに自らすべて行う。緑に囲まれた画室で朝の二時間は集中して絵を描く。

昨年十一月には白寿記念展を開催した。二十号から小品までの新作約三十点を展示したので



ある。大きな作品を描くのはたいへんになったが、年に十点近くを仕上げ、毎日描くことに変わりはない。ただ、変わったことといえば、画風であるという。

若い頃のように外に出て、スケッチをしてそれを参考に風景を描くということではなく、家の中にいて、自分の内面で描きたいものを膨らませて描いている。これまでの蓄積を元に自分の内面へ深く入ってそこから作品を生み出していくようになったのだ。そのため完成までのイメージを持つていくのがたいへんで、そこにはさまざまな葛藤もあり、時間も必要になるのである。

近年の作品のなかで気に入っている作品を挙げていただいた。個展にも出さずに自らずっと持っていた作品だそうである。白から深い緑をともなった灰色までのグラデーションで描かれている。溪谷のイメージであろうか。作品のタイトルは「霧霽れる」。心象風景のような、高い精神性がある。二年前には緑のイメージに取り憑かれているというお話を伺ったが、今の作品からはさらに深遠なる画家の境地が感じられる。

大正七年逗子町久木柏原村に生まれて

鈴木竹柏さんの百年の歩みを振り返る。一九一八（大正七）年、神奈川県逗子町久木柏原村に、兄三人姉四人の八人兄弟の末っ子



霧霽れる 2018年



として生まれた。小学校五年のとき、水彩画で描いた矢車草の絵を先生に褒められたことがきっかけで絵が好きになったという。地元の逗子開成中学を卒業後、私立の美校に行こうと思っていたが、一番上の兄が、日本画家の中村岳陵先生の家を建てた大工さんと知り合ってたという縁から、逗子の山の根にアトリエを構える先生の家に住み込みで内弟子となることになった。

「竹柏」という雅号は、中村先生から、弟子になつてほどなくつけていただいた。出身である柏原村から一字とつたのだそうだ。一九三七年に十九歳で弟子入りし、修業は一九四九年の春に結婚するまで十二年間続く。

戦時中の内弟子時代

戦争を乗り越えての厳しい内弟子時代だった。「中村先生は、夕方近くなると目がぼつちり開き、仕事にとりかかります。私は準備をしたり、絵具を溶いたり、それが大変でした」。鈴木先生はどちらかというと朝型である。「だから、今でもそのくせがついていて、僕は横になるとすぐ寝ますが、声をかけられたらすぐ起きる。ねぼけていたら怒られるということです。いろいろなことを経験させていただきました」。そして何よりも「教えてもらったのではなく自分で描く」という姿勢は中村先生のもっと得たことである。自ら日本画の技術を習得していった。

外に出かけることもままならず、上野の展覧会

を見に行っても寄り道せず、すぐに帰ってくるよう厳しく言われた。ましてや家に帰りたくても帰ることはできなかったのだ。厳しい師弟関係で、弟子を辞めていく人もいたが、貫き通した。努力して何を描くのか自分で考えて行うことで地力がついたという。弟子として忙しい中、時間を見つけては裏山の草木を描いた若き頃の鮮烈なスケッチはいまも記憶に残っている。

日展と院展に出品

「十九歳で、院展に初入選しました。あの時分は院展でも日展でも自由に出せたんです。描いたものを院展に出したら、たまたま初入選して、びっくりしました。ダリアを描きました」

弟子入りした十九歳のときに早くも院展に初入選。若き才能はすぐに開花していった。

二十五歳で新文展に初入選。戦後は一時自由で、日展院展どちらも出すことができた。日展では落



「山」1958年 第1回日展 特選・白寿賞受賞



「陽」2017年 改組 新 第4回日展

ちることなく順調に入選が続き、三十歳の時、日展に出した作品「夕映」は特選候補ともなった。

やがて三十一歳で結婚。葉山に新居を構えた。その後、日展作家の高山辰雄先生が結成した一采社、始玄会などに参加。「高山先生が中心となった若い人たちの研究会にいられてもらったのは良かったです。ずいぶん助かりました」。

日展の中では一九五六年、三十八歳の時に「暮色」で特選・白寿賞を受賞した。その二年後に「山」で二回目の特選・白寿賞を受賞。「そのと

きは一色の山を描きました。ここではないけれど、ずっと続いている山だったと思います」。やはりテーマは自然で、いつも近所の美しい自然を描いていた。「葉山の近くの海とか山とかを描いていましたね」。山も海もある自然豊かなこの土地が大変気に入り、生涯離れることはないのである。

うれしかったのは二回目の特選であるという。一回目の特選は十人選ばれたが、二回目の特選受賞者は、わずか五人のみだった。しかも京都画壇ではなく、すべて関東の作家であつたという。四十

歳のときで、ここがターニングポイントになったと振り返る。「この、特選を五人でもらったときに認められたのです」。

その後、順調に進み審査員になり、活躍の場を広げていた。

一九九七年、七十九歳のときに日展理事長に就任。当時の都知事、青島幸男氏と東京都美術館の入り口で、日展幕開けのテープカットを行っている。また行幸啓の折にはご案内役を務めた。二年間理事長を、その後会長を務め、また画業に専念されることになる。そして今日まで健康で、毎日絵を描かれている。

「僕は医者。薬なんかは飲んだことがないんです」。飲むのは総合ビタミン剤のみだそうです。

ただ、若い頃、結核に苦しんだことがある。三十四歳の一年間は、病氣療養のため制作ができなかった。「医者に、五十歳まで生きることができれば大丈夫と言われていました。今、倍の年になりましたね。当時は山で喀血したこともありましたが深刻には考えませんでした。割合早く治りました」。深刻には考えないというところに、意志の強さとおおらかなお人柄が感じられる。

自然に学び内なる世界を描く

その後は病気らしい病気もせず、風邪も引かないという。毎日絵を描く気力に満ちて、一年先のスケジュールを楽しみにされているという。

かつて中村先生の元では、師と違う画風の絵を

描くことはできなかったが、今は「こんな絵を描いてください」と頼まれることはなく、自分の思うまま、感じるままの作品を描くことができる。

「ただ、絵の仲間とか、後輩でも、みな亡くなってしまい、僕一人です」。今はご家族に囲まれ、日々を過ごされている。鈴木竹柏さんの家系はみな百歳近くまで生きられ、持つて生まれた長生きの遺伝子があるのではないかと思う。特別に何かされているわけではないが、毎日絵を描くことが長寿の秘訣になっているという。「やっぱり絵を描いていると張り合いがありますからね」。鈴木先生の表情は明るい。

こうして毎日描き続けるが、たくさん描いても、画家の厳しい目を通し、本当の作品になる数は少ないという。

そして、今では外に出ることはほとんどないが、いつも、長い廊下を歩くのが運動になるのだという。その長い廊下の一番奥に鈴木先生のアトリエがある。今回、初めてアトリエに入れていただくことができた。

広々とした和室のアトリエには窓から明るい日差しが射し込み、やはり窓の外は一面緑の木々である。こちらのアトリエに移られてから二十年間、蓄積してきたさまざまな資料や絵具などが置かれている。左手から光を受けていつもの座椅子に座り、絵筆を持っていただいた。

描いていた作品に筆を入れ始めると、その場の空気が変わった気がした。静かに、非常に真剣な面持ちで絵と向き合う。画家の絵に対するまなざ

しは百歳を迎える今も変わらない。

逗子に生まれ、逗子で育ち、葉山を愛し、その自然を描く。その作品は、年を重ね、さらに深遠なる世界を呼び覚ます。伺ってきたこれまでの長い道のり。さまざまな経験を経て一筆一筆重ねてこられた作品の数々が百年の人生そのものを静かに語っていると感じた。



藤森兼明

穏やかな表情の向こうには壮大で壮絶な人生があった。藤森兼明さんは富山に生まれ、金沢美大を経て、画家への志半ばで貿易会社勤めアメリカへ六年半。帰国後、様々な出会いと努力で人生を切り拓き、絵を再開。今日まで快進撃を進めてきた。名古屋駅から電車で小一時間、住宅地のなかの、天井が高く、白く明るいアトリエで、息をのむような話が始まった。

Profile

1935年、富山県生まれ。高光一也に師事。1958年、金沢美術工芸大学油絵科卒業。1956年、第12回日展初入選。1980年、第12回日展「画室にて」により特選受賞。1984年、第16回日展「僧院の午後」により特選受賞。2001年、第33回日展「アドレーション パンタナサ」により日展会員賞受賞。2004年、第36回日展「アドレーション・デミトリオス」により内閣総理大臣賞受賞。2008年、第39回日展出品作「アドレーション サンビターレ」により日本芸術院賞受賞。現在、日展副理事長、日本芸術院会員。

幼稚園の頃から絵描きをめざす

今年八十三歳。藤森兼明さんは一九三五年、富山県砺波市に六人兄弟の四番目の三男として生まれ育った。終戦は小学校四年のとき。「あの頃は田舎まで軍国主義が徹底していて、最後の一人まで戦うということでした。私は大学を出て六年ほどアメリカに行っていました。国土が広すぎると実感しました。当時はこんなこと言っていけなかったけれど負けて良かったと思う」。いうのも幼稚園のときから絵描きになりたかったのだ

そうだ。「だから、これで絵を描いても後ろ指は指されないうちで描いてました」。

父親はダムの設計技師で、絵が好きだった。自分分は、好きな音楽を聴いて、部屋に図書館を持って、絵を描いていたいとずっと思っていた。藤森さんのアトリエは天井高四メートルほど。天井まである書棚にはびっしりと画集や本が並び、部屋のあちこちにうず高く画集が積み上げられ、さながら図書館である。

高校は富山県下で唯一の伝統ある高岡工芸高校図案絵画科へ。その後、東京藝大へ進みたかったが、金沢美術工芸大へ進む。

二十歳で日展に入選

この大学入学時に二悶着あった。恩師となる高光一也先生の教官室へ呼ばれた。「どうして入学



画室にて 1980年 第12回日展 特選

できたと思うか?」「何か不都合でもあったのですか?」「実技は開校以来一番できがいい。ところが答案用紙はほぼ白紙だったのでたいへんだった」。初代森田亀之助学長のところへ連れて行かれ、「ああ君か、すごいな。白紙だもんな。おまえ絵がうまいなあ。高光君ならなんとかしてくれるだろうから、まあがんばりまし」と。

それでも東京の夢は二年頃まで消えなかった。藝大の小磯良平先生の絵をとことん勉強した。当時、高光先生からは「おまえ、ひよっとしたら小磯先生にデッサン習ったことあるのか」と言われたくらいであった。

元来、人に頼るのも群れるのも嫌いだった。同級生は二十五名。彼らと一緒のペースで勉強していたはだめだとすぐに悟った。図書館と画室にこもる日々の中、二十歳で日展に入選する。

恩師の高光先生には、先生が亡くなるまでかわいがっていた。大学を卒業する頃には助手として残ってほしいと言われたが、四年のときに父親が急死した。ダム工事現場で腸捻転を起こし、手当が遅れたのだ。当時、助手は四年間無給であった。

絵を離れてアメリカでの六年間

そこで、高光先生の知り合いで名古屋で輸出を行う陶器の貿易会社に就職することになった。しかし、名古屋に来た年、風邪をこじらせて肺炎になり、さらに椎間板ヘルニアが痛み始めた。

当時の社長が東大の整形外科の清水先生と知



り合いで、つばめで七時間かけて一緒に診てもらいにいった。そこで清水先生に言われたことは「藤森君、何をして死にたいか?」である。「できたら絵描きで死にたいと思っています」。「そうか、だったら自然治癒が一番いいかな」と。手術で成功するのは五十パーセント以下。田舎に帰って年末まで療養し、母親の勧めでまた名古屋へ戻る。

年が明けて七月、単身アメリカのシカゴ本社へ送り出された。出向である。中学から英語はほとんど勉強しておらず困ったことになった。初めて英語の辞書を買って勉強し、意志は通じる程になったが、仕事では通用せず、奥さんが米語を教える高校の教師だった同僚の自宅で英会話を教えていただけになった。

アメリカでの仕事は、マーケットリサーチで、日本から何を輸入するか、アメリカ人の生活と何をかうかをまず覚えるのが至上命令で、リサーチのためアメリカ全土を回り、併せて各地で美術館巡りをして、大きな収穫を得た。シカゴに戻るとスケッチを描いては日本の本社へ送った。

カソリックの洗礼を受ける

藤森さんの作品に貫かれている宗教テーマ。そのきっかけはアメリカでカソリックの洗礼を受けたことにある。

元々、信仰心に厚い富山県で育った。「実家は東本願寺派で、物に対する感謝や祖先に対する敬意と感謝はいつも心にあり、成人する頃には、



アドレーション・サンタービレ 2007年 第39回日展 日本芸術院賞



喜多郎シルクロードから天空へのオマージュ 2016年 改組 新 第3回日展

「祈り」のテーマを深めて

そこからずっと日展に出している。日展特選、光風会奨励賞と毎年のように受賞した。三十代も半ばを過ぎて、本格的に巻き返しを図ったのだ。しかし、自分の絵が生き残れるかどうか迷い、テーマを持たなくてはいけないと思い始めた。

さん、応援してあげたら」と言ってくれました。そうして、完成した我が家で、アメリカから帰ってきて初めて大作を描いて日展に出した。しかし、家のなかでは採光がうまくいかず、少し経って庭の所にアトリエを建てたいと思い、なんとか電信柱の廃材を利用して、二〇〇万円でアトリエを建てることができた。

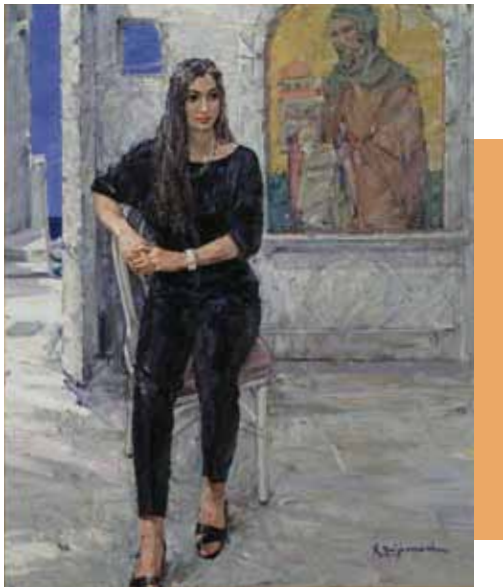
「自分には、アメリカで洗礼を受けた『祈り』という心の中のテーマがある。その祈りを人物と組み合わせ描けばいいのではないか」。ギリシャのハトモスに一人で旅行した。ヨハネが追放されて黙示録を描いた島で、モザイク画の聖人の絵が中庭にはめ込んであったのを見て「そうだ」と思った。二回目の特選を受賞した作品である。高光先生が亡くなられた時は哀悼の意で「レクイエム」を描いた。遺跡を巡り、少しずつ祈りの深みに入り、エポックや時代の推移をコントロールしながら構成を考えていく。制作は昼間に限る。採光の問題と、夜は料理をしてワインをあけるのが日課となっている。絵のモデルは家族のこともあり、音楽家喜多郎氏とは友人である。独特の絵肌の理由は、下地に陶器と大理石の粉を混ぜて質感を出しているという。四層ほどに

絵具を重ねるなかで、金箔を貼り込んでいく。二回三回と重ね、乾きを考えながら一気に貼り込むことになる。

一番難しいのは画面構成であるという。これまで蒐集してきた祈祷書の種類や時代など考慮しイメージを高めながら決めていく。フアクシミリ盤の貴重な資料も多数ある。

自らに負荷をかける

近年は、毎年展覧会をすることに決めている。来年は郷里の富山でも開く予定だ。「脳も体も劣化し始めているから歯止めをかけるには負荷をかけるよりしょうがない」と常に自らに発破をかける。最後に若い人へのメッセージをうかがった。「自分を守るためにデイフェンスを張ってはいけない。あえて指導的な立場にあるからではなく、同時期に起こることは同一目線で、それを理解しながら接する。そうでないと自分たちの世代も生き残れません。互いに刺激を受け合いながら時代を作っていければいいのではないか。世の中いろいろなスタイルや環境があるが、そこを切り抜ける質の高い自我の世界を築きあげようとする。それには自分に負荷をかけ続けると、思った半分くらいのことを表現できるのではないのでしょうか」。



僧院の午後 1984年 第16回日展 特選

あり、迷いましたが親にひと言断るべきだと考えました。海底ケーブルでつながる電話を田舎の近所の米屋さんにかけて母親を呼び出してもらった。「おまえは、帰ってきても居場所がない身だから、おまえの信仰は自分で決めなさい」と許可をもらい、クラークさんからは「毎週日曜に一時間半、聖書の勉強から、物を信じると言うことは自分のためだけではない、そうしたことを含めて半年間勉強しなさい」と言われ、教会に通い始めた。半年後の渡米三年目に洗礼を受けた。

帰国後、「一体何で死にたいか」を問う

日本の会社組織を学ぶ前に旅立ち、帰ってきたのは二十九歳のときだった。アメリカでは、雇われた本人が自主的に会社のために自分の判断で仕事をし、組み込んでいた。上下関係のある日本で仕事を始めると、社長から「おまえの働き方はアメリカ流だ。ここは日本だから事務手続き、業務内容の報告をきちつとしてくれないと、ここに居てもらうわけにはいかないかもしれない」と宣告される。その間も二度ほどアメリカに呼ばれ、現地の社長に相談すると、「移民してきて働いたらどうか」と誘われた。しかし当時は結婚しており、夫人からは大反対された。結果、ある日突然社長に「辞める」と告げる。朝礼の後、社長の前で企画デザインやスケッチを粉々に破いて社長の机に放り投げた。「そのくらい自分にやらせたら、会社も辞められるし絵描きに返れるチャンスだと思った。このまま会社に住たら、給料

はいいかもしれないが普通の勤め人になる。かつて『おまえ一体何で死にたいか?』と清水先生に聞かれて答えた。その自分に対して偽りの人生を送るのかという気持ちはずっとあつて。情性に流されて自分の本性を見間違える、そこまで性根が腐ったのかと。自分にけりをつけさせてもらいました」。

その後も食べていかなくてはいけない。子どもも生まれ、絵描きに戻るまでは五年ほどかかった。アメリカのクラークさんが会社を辞めて独り立ちし、日本での業務を手伝った。しかし、それも立ち行かなくなつて、いくつかの貿易商社を手伝った。

その頃、第一銀行名古屋支店の外為勤務で五歳ほど上の若い部長と友達になった。彼から「藤森さん、嫌々貿易の仕事やっているみたいだけど嫌だったら辞めたら。絵描きになりたいんだったら人に迷惑かけてもいいから絵描きに戻ったら」と言われた。「それには長屋住まいで絵は描けないだろう、あなたは一銭もお金がないけど、家を建てようか」と。彼の大学の先輩後輩のついで、良い物件を見つけ、支払い方法も計算してもらい、いよいよ家を買うことになった。

高光先生が大阪の梅田画廊で個展をされた時に夫人とふたりで出かけていって「先生、絵描きに戻ります」と伝えた。「おまえ、そういうけど卒業して既に十年経っている。同期の連中は日展でも光風会でも会友、会員になって、今から始めたらそのギャップはなかなか。止めとけ」と言われた。しかし高光夫人が「絵描きになりたくて生まれてきたのに、いろいろあったから、でも戻るというならお父

蛭田 二郎

岡山駅前前の桃太郎大通りには蛭田氏の制作した桃太郎のブロンズ彫刻が並ぶ。桃太郎、猿、犬、キジそれぞれが、おとぎ話の主人公ではなく、実際の人間の姿に見えてくる。出身の茨城では、岡山のアトリエにあった約三〇点を寄贈して「蛭田二郎彫刻ギャラリー」が二〇一六年にオープンした。戦時中の幼少年時代から八十五歳の現在まで、さまざまな「辿り」を経てこられた蛭田氏の語られたひとつひとつの話にはたいへんな重みを感じられた。

Profile

1933年、茨城県生まれ。小森邦夫に師事。1958年、茨城大学教育学部卒。1965年、第8回日展初入選。1966年、第9回日展「ひとり」により特選受賞。1967年、第10回日展「女」により特選受賞。1968年、第11回日展「女'68」により菊華賞受賞。1966年、第28回日展「告知」により文部大臣賞受賞。2002年、第33回日展出品作「告知-2001-」により日本芸術院賞受賞。2016年、北茨城市蛭田二郎彫刻ギャラリー開設。現在、日展顧問、日本芸術院会員、岡山大学名誉教授、倉敷芸術科学大学名誉教授、日本彫刻会常務理事。

北茨城に生まれて。小学校の教員時代

蛭田さんは昭和八年、北茨城市に生まれた。小学校二年から六年までは大平洋戦争のまっただ中で、三年からは松脂採集、農家の勤労奉仕、ヨモギ採り。学校の校庭では所狭しと南瓜や大豆を作っていたという。

家の仕事をするのがいやで、担任の先生の文学全集を借りて片っ端から読んでいた。「明治・大正の文学の書き出しはすべて覚えていました。絵も彫刻も私は全てが自学自習なのです」。



近くの五浦にはよく海水浴に行ったが、ここは岡倉天心や横山大観、院展の大家等々、著名な作家が活動した場所である。父から「絵描きさんはいへんだなあ。苦勞するな」という話ばかり聞かされていたから、自分が将来美術家になるとは夢にも思っていなかった。

高校を出ると代用教員になった。全校で五十四名の複式学級の山の中の学校だ。十二キロの山道を通ってくる炭焼きの子供達もいて、一緒に勉強した。振り返ればその頃が一番楽しかったという。村の青年団と一緒に菊池寛の「父帰る」を演じたり演出したり。農家の離れを借りて自炊した。子供と一緒に昼寝したり、山の急斜面にある木に登ってアケビの実を取ったり、今の時代では考えられないようなことをしていた。

ところがある日、新制大学を卒業し教員の一級免許を持った人が出てきて「おまえ達は一年契約だから首になる」と驚かされ、「これはいへんだ」と月に一度、山を下りては本を買って読んだという。家から米をリュックに入れて背負い、山道は材木を運ぶトラックに乗せてもらった。深い轍の中を車が走り、振り落とされそうになるのを必死でトラックの紐にしがみく、そうした日々を送った。当時は校庭にあった二宮金次郎の彫刻しか見たことがなかった。彫刻を知るよしもなかったのだ。

その後学校の教員免許をとるために茨城大学で勉強する中で、塑像演習や実習、彫刻理論などの授業を受け、生まれて初めて粘土で物を作るということをした。モデル台に女性を立てて、作った。

「作り方もいろいろ学び、朝倉文夫の『彫塑論』も読みましたが、最終的には一つの作品に一つの制作方法。一つのイメージネーション、一つの心棒、一つの土の付け方、一つの形態があり、本当に自由でいいんだという境地に達しました」

大学卒業後は小学校の教員をしていたが、ある日、中学校の美術教員がいなくなり、強制的に移らされた。今度はバスケット部の顧問になり夜八時、九時まで残り、無理がたたつてとうとう十二指腸潰瘍で一カ月も入院。こんなことをしていたら彫刻も作れないと東京へ移ることを考えた。その頃、小学校の同僚の音楽専科教員の先生と結婚した。今年結婚六十周年である。

東京での教員十年間。子供の能力を伸ばす

二十八歳で東京都の試験に合格したが、面接の日がちやうど三年生を修学旅行で日光に引率した二日目だった。なんとか学年主任に頼んで、東武日光から浅草まで行つて足立区の指導室にたどり着くと既に面接は終わり学校の配分も決まっていた。

困ってじつとしてみると、指導室長が「君を採用したい」と言い出した。東京は人口が急増していたのでうち学校ができるので待機するよう言われ、その後美術の専科教員となった。時間割を自分で決めることができたので、午前中に授業を詰めて、午後は展覧会ばかり見ていた。当時はグレコ、マンズー、ファッチーニなどのイタリア彫刻全盛期。夜は太平洋美術学校でデッサンをやりなおし、もう一度モデルを見ての勉強をした。

茨城県展や東京でも展覧会に出し、借家の小さな玄関の下駄箱の上で作った作品が賞をとった。しかし、それでは満足しなかった。図工の教員として専門の彫刻を極めるとともに、子供達がどうしたら豊かな人間に育つかを一生懸命勉強した。

イメージネーションを豊かにするための教育に取り組んだ。授業では音楽や宮澤賢治の物語の絵を描かせたりした。子供を順番にモデルにして三分クロッキーをした。シーンとした中で三分間集中すると全員が見事なクロッキーを描く。その後おもむろにお話の絵を描かせたりする。「腕の高速道路」といったような題名で無限にイメージネーションを発展させて



鳥のある長い髪の女'78 1978年
岡山県立朝日高校 北茨城市大津港

描くイギリスのマリオン・リチャードソンの教育方法も取り入れた。『注文の多い料理店』の絵を描かせたら一人の子が自由ですてきな絵を描いたので、額に入れて図工室の前にかけた。子供はうれしくて年中見に来る。通信簿に五をつけたら、「他の成績は一か二なのバランスがとれなすぎる」と担任に言われたが通した。その子は中学生になってもうれしくてその絵を見に来ていた。その後写真の学校に行つて、カメラマンになったと風の便りに聞いた。「そうやって人は伸びます。『人は三日逢わずんば刮目して見るべし』と言いますが、大学に来てからも学生に信条にしてほしいと言っていました」。人間誰もが外見からはわからない色々な能力を持っていて、人間は変わることができる。

県展から日展へ応募

茨城県展で知事賞などをもたらい二十八、二十九歳のときに大きな作品が作れることになった。職員室の机の上で自らポーズをとって同僚の先生に写真を撮ってもらい、理科室の戸棚の隙間で「L字形ポーズ」という作品を作った。それが日展の初入選だ。その後、空いていた用務員室の窓に模造紙を貼つて子供達にのぞかれないようにし、モデルを連れてきて作った。その作品で特選をとることになる。

当時日展の応募数は多く、心配でおずおずと作品を搬入すると脇を通った風格のある先生が「いい作品だな。君、これが入らなかつたらどうするか」とおっしゃってくださり、喜んで家に帰った。二回目の特選はイタリア彫刻風な作品だった。

のを表現したい。人間の内面も全部ひっくり返して表現したいというのが、具象彫刻の本質だと語る。「彫刻は掌の感覚を通して、内側にしっかりと構造化を持った立体を表現する。お金にはならないけれど、純粹に自己表現できる一番の素材が粘土であり塑造であるということを知り人に知ってもらいたいですね。ただ単にモデルをよく見て細部まで作つたからいいという問題ではないということです。もう少し思索を深くして自己表現の本質をつかまえて作品を作ってほしいです。制作するのにお金がかかる、場所はある、時間はかかる、回りは汚れる。いいことはないがそれでもなおかつ彫刻で自己表現したいという本質は何か。それをよくよく考えて、塑造に挑んでほしいというのが、私の今のこれから育つていく人たちへの願いですね」

一九七二年、四十歳で岡山大学へ

一九七二年、岡山大学が大学院修士課程をつくるので、願書を出してみないかという一通の葉書が舞い込んだ。千葉の南柏にアトリエを建てて二年の時だった。「大きな作品はそこで作っていて東京にいたいと思ったのですが、家内が岡山に行けばモデルを見て勉強ができる。自分の専門として彫刻に専念できる」と。それですぐに家内が書類をそろえてくれて面接に行つたのです。面白かつたです、色々。だから私にとっては「辿り」以外の何物でもないのです。

その後は、倉敷芸術科学大学の発足の二年前から携わり六十三歳で岡山大学を退職。その後二年



St. Mary Magdalen 1982年



ヨブの裔 1984年(部分) 第16回日展



St. Mary Magdalen 1998年

間文部省にも通い交渉し、学部長としてたいへんな思いで修士課程や博士課程を作った。九年経つて第一号の絵画の博士を出して、特任教授を一年勤め退職。二〇〇二年、日本芸術院賞をいただく頃は多忙を極めた。

坪田譲治の文学との出会い。 家族をテーマに制作

近年の日展作品は家族像が多くなった。そのテーマのきっかけは一九八四年に遡る。岡山出身の児童文学者坪田譲治の文学碑の仕事を頼まれて、家族と子供、子供の育ちについて考えるなかで、坪田譲治の「童心馬鹿」というエッセーに出合った。「そこで

人生の「辿り」を主張し、表現するのが芸術

その後、日展の審査員となるが、自分の作品に理論的な根拠を確立しなくてはいけないと考えた。ハーバード・リードの『若い画家への手紙』の一節に心を動かされた。「自分の存在の過程を断固として主張するのが芸術なのだ。だから単なる作り物ではない。頭で作つたものは単に作り物にすぎない。辿つてきた道のその全体が出てくる。それを表現しないで一体何の芸術だ」。また、心と体が一体であるという、心身一元論を説く。「精神としての肉体というのがあるて、どうしてもなく自分の内側からしやしやり出てきて自分自身に命令するという感覚性がある。それがいわゆる、プティック(内触覚)なものです。彫刻はその原理原則を知らない、いわゆる芸術としての存立がなくなる。いまや形態だけ、デザインだけという現代彫刻があふれている」と警鐘をならす。

具象彫刻で人間そのものを表現したい

「人間の心からのもの、身体感覚の丸ごとの触覚性を表現した作品が世の中から消えていくなかで、日展の存在は大切なんです。だから個人の存在があつて、個人の身体感覚から人間の形を通して自分の思想、感覚、ボエジーすべてをひっくり返しての表現。文学だつて音楽だつてそうです。ロダンの作品が未だに生き生きして生命力をもっているのは、外形だけを追いかけてはいないのです」

具象彫刻でなくては表現できない人間そのもの

は『永日感』ということを行っています。子供を幼少のうちにゆつたりとした時間の長い感覚の中で育てないと、子供が青年期の艱難は乗り越えられないということなんです」。

その頃、九州の大学に進んだ長男が急に入院したという電話を受け迎えに行くという事態が起きた。身体が硬直して動かないという。岡山駅まで背負つて帰った。何かの原因で心身症を患つたという。「童心馬鹿」を読み、子供が幼い頃一日に何ヶ所も預け回されて気遣いばかりしていたことに思い当たった。「子供が幼いとき、ちょうど特選を取るころ教職と彫刻でものすごく忙しく、さらに痛風で動けず病院通い。音楽専科教員の妻も児童合唱に打ち込み、「Nコン」で全国二位になりましたが、その時期の二人の多忙さは想像以上のもので、それ程私の辿りは大変だったのです。苦労話はあまりしたくはありませんが」。

子育て期の反省から、坪田譲治に共感。それから、子供や家族、家族愛、少年少女の幼い時の幸せな空気感など、そうしたものがテーマとなった。九十年から三年間は岡山大学付属幼稚園長も務めた。

「今年の作品は『永日抄2018』です。今、八十五歳になり、粘土をこねるのが体力的に少々辛くなってきたので油土を使つてやっています。私はひとりです。今後は作品は何が出てくるか、妻の全面的な協力への感謝の思いなど暮らしや心の有り様、問題意識の有り様で、どのようなものが出てくるかです。多病息災で胆嚢も全摘出しました。私の「辿り」はたいへんで、これまでいろいろありましたが、日展は一度も休んでいないのです」

今井政之

Profile

1930年、大阪府生まれ。楠部彌式に師事。1957年、広島県立竹原工業学校金属工芸科卒業。1953年、第9回日展初入選。1959年、第2回日展「焼〆『盤』」により特選・北斗賞受賞。1963年、第6回日展「『泥彩』壺」により特選・北斗賞受賞。1998年、「赫窯 雙蟹」により日本芸術院賞受賞。2009年、旭日中綬章受章。2011年、文化功労者。現在、日展顧問、日本芸術院会員。

竹原で過ごした戦争一色の少年時代

竹原出身の父親が大阪で印刷事業を始め、そこで今井氏は生まれた。戦争が始まると父は軍属を命じられ関東軍新疆の満洲司令部へ、家族は竹原へ疎開し、今井さんは地元の中学校に入学した。元々商業学校であったが戦時中は工業学校に替わり、金属工業科に席を置くと、学徒動員で三井金属で働くことになった。溶鉱炉で金属や鉛を溶かし、銅を分解したり、夜を徹してボイラーを燃やすなど勉強どころではない少年時代を送った。



京都で楠部彌式先生との出会いと日展

京都では一代目の勝尾青龍洞先生のところへ学んだ。そこには外国の文化を取り入れて新しい陶芸をやるうといろいろな作家が集まっており、前衛陶器が流行りだした頃だった。昭和二十八年、楠部彌式先生が三十人ほどの若い人の研究グループ「青陶会」を作った。そこに創立会員として迎えてくださり、やきものに対する新しい生き方を学んでいった。そうしたなか、今井さんは「躍鳥『扁壺』」で日展に初出品して初入選する。「田舎から京都へ行って研究グループにいれてもらい初めて出してもらった作品が入選ということで、非常にうれしかったです」。今その作品は広島県立美術館にあるという。

その後落選、入選を繰り返し、昭和三十四年に備前の土を使い京都の登り窯で作った「焼〆『盤』」が特選を受賞。「本当にびっくりしました。青陶会グループで最初の受賞でした。この作品は、竹原出身の池田勇人さんが総理になられた時にお祝いとして池田家へ持って行ったのです。そうしたら喜ばれて、

亡くなられてからは地元のはたら美術館に「あります」。一九六三年に二回目の特選、六五年に審査員

となった。「ただ、一回目の特選の後も落選になったり、波乱万丈を乗り越えてきました」。楠部先生は日展作家で、六代目清水六兵衛先生と並び、その時代京都で陶芸を支え、国際的にも活躍された方だった。「仕事に対しては厳しかったです。その中でよく育てていただいたと思って感謝しております。弟子は最終的には四十人ほどいました」。

京都の登り窯を継いで竹原へ。誰も手がけていない面象嵌への挑戦

その後、ある転機が訪れる。昭和四十年頃京都の街中で登り窯が焼けなくなったのである。「五条坂あたりはやきものに関する業界が多く以前は煙を出しても平気でしたが、新たな住人から洗濯物が汚れるという苦情が出たのです」。

それで電気窯を使うことになったが、最初はレリーフや苔色の釉薬を考えて作品にしたり、中国の土を使ったり、宋代の青磁も勉強した。様々な事を試しながら誰もやっていない一つの形の中にいろいろな土を入れて焼く「面象嵌」ができないかと始めたのが昭和四十二年頃だった。しかし、そう上手くはいかず、失敗を繰り返し、満足いくようになるには二十年を要したという。そのなかで今井さんはどうしても以前のように登り窯で焼きたいと思った。「友人八人ぐらいのグループで、岐阜に共同の登り窯を築き、焼成した時代もありました。しかし、やはり窯は自分で持たなくてはいいけないと思い、竹原に窯を築いたのが昭和五十三年の春でした」。何百

十七歳で中学を卒業し、絵が好きだったので「絵描きになろうか」という話を父親にしたところ、「絵描きでは飯は食えんからやきものをやったらどうか」と言われた。そこで、京都に上ろうと思ったが、当時京都は食糧難で転出できず、岡山県備前の会社に入り、まず備前焼を勉強することになる。その後、岡山県の陶芸の試験所に就職し、二、三年ほど、県の職員をしながら釉やデッサン、やきものの勉強をした。備前では桃山時代の古備前に似たものをまねて作るのが立派な作家とされた。しかし、今井さんの思いは違った。「私の場合は『創作』を狙っていました」。備前では創作作品ができないと思ひ、京都の知り合いを頼って昭和二十七年に上京した。まだ配給が続く闇市が流行った時代。最初に目指した京都へ行くことになる。



焼〆盤 1959年 第2回日展特選 たけはら美術館蔵

年も続いた京都の登り窯を継いでいかなんといけないという思いと、自分しかできない創作作品にしないという信念があつた。父親が元気な頃、段々畑を作っている知り合いから土地を譲っていただいたという。「傾斜面がいい塩梅にあつて、周囲に家もなく、仕事をするのに環境もいいし、ここに窯を築けたのは有難く、先祖のおかげでもあります」。



2018年の新作

まで続いているような気がします」。金属酸化物を土の中に入れて色をつける。学徒動員の経験が自分の将来に役に立つとは、当時は知るよしもなかったことだ。

窯に伺ったときはちょうど、窯出しの翌日であつた。「一年に二回焼くのです。やきものというのは自然のもので、自然の土を使って造形化するわけです。大量の赤松を薪にして、不眠不休で一週間、徐々に温度を上げて一三〇〇度まで上げます。そのなかで土は陶へとゆっくり生まれ変わります。二週間かけて四十度台くらいまで冷めますのです。私の場合は薪の窯でないという土味のもので焼けません」。窯には「豊山窯」と、長年焼いてきた京都の窯の名前がつけられている。

さ、あの時の感動を土の上に再現したい。生きた魚を面象嵌で表現し、決して図案でなく、生き物そのものが形の中に一体化するのを狙っているという。象嵌によって作品に定着された生き物たちは、確固とした存在感をもって生きている。

最近石垣島まで毎年出かけていく。

窯に伺ったときはちょうど、窯出しの翌日であつた。「一年に二回焼くのです。やきものというのは自然のもので、自然の土を使って造形化するわけです。大量の赤松を薪にして、不眠不休で一週間、徐々に温度を上げて一三〇〇度まで上げます。そのなかで土は陶へとゆっくり生まれ変わります。二週間かけて四十度台くらいまで冷めますのです。私の場合は薪の窯でないという土味のもので焼けません」。窯には「豊山窯」と、長年焼いてきた京都の窯の名前がつけられている。

自然の生き物をやきものに存在させる

作品のモチーフの多くは動植物、魚、鳥、貝など。少年のころ竹原の海で見た生命のもつ輝きと美し

「非常にカラフルな魚が多くいます。自分で釣らないと意味がなく、自分で釣って生きたものを写生してモチーフにしています。生き物とともに作品が成り立っている。草花でも生き物との対話を作品の中に盛り込んでいくという仕事をしています。しかも薪の窯で自然の炎にひたしながら自分で窯変を計算します。偶然ではなく窯変を必然的に出して作品の雰囲気を出すという仕事をやっています。これは日本では誰もやっていません。戦時中、空襲のたびに防空壕の中で、土で形を作って銅や鉛を流したりして遊んでいました。それが物づくりの始まりでした。そういうものが今日

一昨年は赤仁という釣った魚をモチーフにした。赤い色を出すのが最も難しいところだという。「一二八〇度くらいの温度で色が出るような赤い土を自分で作り出します。赤というのは大体上絵で九谷焼や有田焼にあります。赤というのには低い温度なのです。私の場合は高温で出すので、非常に困難でした。面象嵌の難しいところは収縮をコントロールしなくてはならないことです。焼くと縮み、面が広いほど収縮率が変化しますので、象嵌する土もいろいろな所から取り寄せて調合します。誰も教えてくれる人はいなかった。自分で研究して失敗しながら挑戦してきたわけです。

去年は数えて八十八ですから、めでたいのいいかと思つて石垣島でつかまえた五色海老を象嵌しました。今年も八月に石垣島でモチーフを探したいと思つています。サンゴ礁から離れた沖合は絶壁になつていてその辺はいろいろな魚がいます。どんな生きものと出会えるか今から楽しみにしています」。

苦勞して回り道して得るもの

若い人へのアドバイスを伺うと、「私がやってきた道のりはいろいろありますが、やはり自分の世界を作品に影響させていくことです。しかも新しい感性は自分で磨くもので人から言われてできるものではないわけですから、それぞれ個々の勉強を作品に影響させていってほしいです」。

今は電気窯で焼く人が多く、最近ではコンピューター制御でできるようになって、極端に言えば寝ている間にできる。するとどこかに油断ができると語る。

「昔は手回しで勉強したのですが、今は電動で、土も土練機があり、ものを作るのが安易になつてきました。私らのように一点一点作つて、一本一本薪をくべて窯で焼くと、緊張感もあるし、作品に対する思いも挑戦も膨らみます。とにかく作品に個性をいれて表現していくことを考えて、どんどん新しい世界を開拓していってほしいと思います」。

しかし自分の感性だけで作るのではなくいろいろな勉強をし、人間そのものを自分で磨くということが必要だと思います。若い頃は中国の青磁を勉強したり、朝鮮の李朝の作品など、古いものいいものを見て、自分で実際に手掛けていく時間を過ごしてきました。今はいきなり新しいものを作つて早く作家になりたいという風潮がありますね。いろいろな試して苦勞する時間帯がほしいなと思います。また科学的にものを考えて作っている人が増えてきました。そういう勉強をしながら新しいもの、自分の世界を発見していくのは大事なことです」。



赫窯 雙蟹 1998年 日本芸術院賞受賞作



象嵌彩赫窯 ピラーラ 壺 1993年 第25回日展

土と生きたモチーフとの競演をめざす

今後について尋ねると、「色々な土がありますから、それを発見して自分の世界をもう一遍作り直していきたい。面象嵌は私の技術的なメインになりますので、それを生かしながらいろいろな生きたモチーフを発見してそれとの競演を作品の中に作っていきたい」と語った。

今井さんは海外でもアメリカ、フランス、ベトナム、中国など数々の展覧会を開いてきた。

面象嵌の作品をボストンのピーボディ博物館で一カ月間展示されたことがある。そのときイングリッドから渡ってきた二百年前の建物を見て感銘を受け、それを参考にして現在の美術館の建物を作ったという。建物の屋根の上には風見鶏ではなく、今井氏が午年生まれであることから、ボストンの骨董品店で手に入れた風見馬が回っている。

若い作家の挑戦に期待

最後に日展に対する思いを語っていただいた。「このところ日展改革といって理事の先生方が苦勞されまして、最近やっと落ち着いて元に戻ってきましたが若い人の出品が減ってきているのが残念です。やはり日展の魅力は一一〇年の歴史があるわけですから、若い人にとっても魅力がある公募展にしなければなりません。そして若い人の感性を取り入れ、常に進化しなければならぬと考えています。そのためには私たちの努力が一番大切だと思います」。

新井光風

十七歳のときに神田の書店で手にした西川寧先生の『書道講座』という書物。そして日展で見た書。この出会いから人生が大きく変わったと語る新井光風さん。その日から、書の怖さに取り憑かれたように学び始めた。二十七歳で師の門を叩くまでと、師の下で学んだこと。遡れば戦時中の小学生の時、ひとり疎開した埼玉県での物を作る体験や初めて試した筆の感触など、さまざまなエピソードをお話しいただいた。埼玉県南西部のニュータウン、ふじみの駅そばの眺めのよいご自宅アトリエを訪ねた。

Profile

1937年、東京都生まれ。西川寧に師事。1966年、第9回日展初入選。1972年、第4回日展「九穀斯豊」により特選受賞。1978年、第10回日展「熱鐵」により特選受賞。1994年、第26回日展「雲龍風虎」により日展会員賞受賞。2000年、第32回日展「盛稲梁」により文部大臣賞受賞。2004年、第35回日展出品作「明且鮮」により恩賜賞・日本芸術院賞受賞。現在、日展理事、大東文化大学名誉教授。

疎開先で、木の飛行機づくり

新井さんは、四人兄弟の長男として、昭和十二年、渋谷区に生まれ、戦時中の小学校一年から四年まで、埼玉県の親戚の家にたつたひとりで疎開した。父親は戦争に行き、母親や兄弟は東京に残ったのだが、この四年間が面白くてしょうがなかったという。

それは、学校の帰り道に桐のタンス屋に寄ることだった。背伸びをして、窓からタンス職人が削る桐の木の切れ端が散らばっているのをじっと見てい



筆のぐにやっとした感触に惹かれて

書との出会いを振り返ると、「家に、親が使っている筆や硯があつて、それを書いて動かしたときの筆の「ぐにやっ」とした妙な感覚に興味をもったのです」。

石蠟や鉛筆で字を書いたりという硬い感触しかしらなかったで、それ以降、筆を動かすことが楽しみになった。好きなので書くことが増え、小学校で展覧会に出すと賞をもらった。「ただ、当時は上手く書けたということではなく、筆でいたずら書きをしているような、筆を動かす楽しみのようなものが中心でした」。

西川先生の書物と書に出会う

「この本が私の出発点なので、いつでも手を伸ばしたら触れるところに置いています」と書棚から出された本は、紙が黄ばんで古めかしいものだった。十七歳のときに神田の書店でみつけた西川寧先生の書いた『書道講座』である。隷書、篆書など数冊に分かれ、書について詳しく記されていた。「この本に出会ってから文字通り私は変わりました。ただ筆を動かして文字を書くものだと思っていたのが、『書とは恐ろしくすごいもの、これは大変なものだ』と思い、『これならやってみたい』と思ったのです」。

同じ年に日展で西川先生の楷書の作品を見てさらに感銘を受けた。その日から一回の展覧会に何度も通うようになった。

「毎回テーマを決めて展覧会を見ました。今日は日展で全作品の『墨』を基準に見て帰る。別の日は『線』をテーマに、次は『構図』『空間』、次は『渴筆』をテーマに、もう気が狂ったように見ます。日展でなく、ほかの展覧会でも同じような見方をします」

工夫して一つの物事に徹底して集中して取り組む姿は毎日桐筆筒の店に通って夢中で飛行機を作った小学生の頃にも重なる。



明且鮮 2004年 第35回日展出品作恩賜賞・日本芸術院賞受賞作



『書道講座』西川寧 著

あと焼け野原でした」
小学校六年のときには、空のリュックを背負って京王線に乗り、ひとりで高幡不動まで食料の買い出しに行ったこともある。駅からしばらく歩き、「食べるものがあつたら譲ってください」と訪ねていくと、どの農家も優しくしてくれた。その話が近所に広まり、うちの子も連れて行つてほしいとなった。「こうした経験の一つひとつがあまり辛いか大変いうことはなくて、自分のやりたいように生きてきた感じがします」。戦中・戦後の激動の時代の苦労も、新井さんは柔軟な発想と豊かな創造力で楽しみに変えていったのだ。

三月十日に東京大空襲となった。その直前に母は危険を感じて弟妹を連れて埼玉に来ており一年ほどは一緒に生活をした。五年生で焼け野原の東京へ戻り、父親が兵隊から帰ってきた。「初台の自宅からは新宿の伊勢丹が見えました。あとは焼け野原でした」
小学校六年のときには、空のリュックを背負って京王線に乗り、ひとりで高幡不動まで食料の買い出しに行ったこともある。駅からしばらく歩き、「食べるものがあつたら譲ってください」と訪ねていくと、どの農家も優しくしてくれた。その話が近所に広まり、うちの子も連れて行つてほしいとなった。「こうした経験の一つひとつがあまり辛いか大変いうことはなくて、自分のやりたいように生きてきた感じがします」。戦中・戦後の激動の時代の苦労も、新井さんは柔軟な発想と豊かな創造力で楽しみに変えていったのだ。



中国の書物で、古い時代を調べる

すると今度は、中国の古い時代のことを調べたくなった。書体には、楷書、行書、草書、古い書体になると隷書、もっと古い篆書がある。

「私の場合、隷書から逆に書道史を遡って書体が変遷する過程で作品を発表しているのです。数百年ずつ遡って、字が変わった。その過程で文字を調べる。どんどん調べることで自分のなかでそれが膨らんでくる。さあ、大変だということ、今度は中国のものを見ることに食欲になってくる。中国のものを直接見たい。たとえば向こうで何か出土したらすぐに見たい。発掘報告書が出たら早く見たい。すると、中国語が読めない仕事になります」

研究を続け、自分の作品をつくる。自分の字を書きたいためにとことん調べる。「日展でわずかに二字とか三字の作品を書きますが、その前に資料の下調べに相当な時間をかけます。私はたいてい本を二冊買って一冊はきれいに取っておき、片方は自分のメモ用に使います」。

新井さんの書棚には上から下までびっしり書籍が

並ぶ。八割が中国の本だそうだ。本には細かなメモが書き込まれている。また、つぶれている字を解説するには、模写をして文字学的に確かめる。長い工程を経て、ようやく二文字、三文字を書く準備ができる。

二十七歳で西川寧先生の門を叩く

十七歳で『書道講座』の本と出会ってから、十年間にわたり中国語などの勉強を通して力を付け、二十七歳のときに初めて西川寧先生の門を叩いた。その時には文字を調べる上で必要な、中国から出る報告書を読み解く力を蓄えていた。書かれているものはすべて中国語なので、わからなければ行き止まりなのである。

「西川先生の本は片っ端から読ませていただきました。遠回りでしたが、そうしないとだめだと思いました。書というのは、筆と墨があるとすぐ出発できそうですが、それではその先が困るので、土台を築くということです」

メモをとらずに恩師の話を聞いて覚える

西川先生の稽古はいつも午後二時から始まり夜中の一時か二時に終わった。「だいたい午前十時に来て順番を待つ人もいます。一人一人作品を出して一対一で見えていただく。私が帰るのはいつも遅く、喫茶店に朝までいて帰ることもありました」。先生の話は書だけではなく中国や歴史、本の話など多岐にわたった。「前にお聞きした話を忘れると、次の

からは、新井さんが一カ月おきで原稿を書くことになった。中国で出土したものを紹介しながら字の特色を書いた。印刷前に先生に見ていただき、直しをいただくに約束して伺った。すると、二時頃から夕方くらいまで偉い先生とずっと一対一で話ができた。「先生も私も正座で座ります。長く座っていると足が痛くなって足を組み替えるとその瞬間に体が揺れる。すると先生は『君は小便したいのか』と。二度組み替えたら『やっぱり』と先生は言われました。私の体は二、三時間は揺れもしません。そのくらい緊張して、先生の話だからこちら真剣勝負のようなどころがありました。しびれたら身体を崩して楽にすればいいのですが、そんなことをしていたらしびれは克服できないからしびれたまま通してしまおうと思いました。

先生は具合の悪いところだけ紙を折って返されるのです。それでそこをもう一度やり直す。折られないかと思つて頑張り、一度だけ折られないことがありました。こうして原稿を返していただいて、玄関で靴を履き終わってもまだ話をされていて、ここで一時間なのです。話が好きな先生でした。先生には何から何までお世話になりました」

西川先生の大量の著作や論文はすべて読んで図書カードを作つて記録している。「西川先生の書と書学のすべてが私の心の柱となっていて、それはずっと変わります。何があつてもそれに照らし合わせてものを考えるので、迷うことはありません」。

二十八歳で初入選

日展の初入選は二十八歳のとき。そこで書いた文字にはあるエピソードがある。弟子達で展覧会を見に行った帰りに五、六人でお酒を飲んで夜十一時過ぎになつて先生に会いたいということになった。そこで先生に電話をすると、快く家に招き入れて、またお酒を出していろいろな話をしてくれて帰りがけに一冊ずつ大事なものをごくださった。「先生が清の鄧完白の詩をまとめた私家本でした。昭和四十年五月二十二日と書き入れてあります。このなかの詩を書いて日展に初入選したのが、出品作『山居早起』です」。その本はボール紙の間にはさんで大切に保管されている。



老子・玄符第五十五 2016年



一龍一蛇 莊子・山木第二十 2015年

時に先生は相手にしてくれなくなります。その代わりこちらが対応すると先生はどんどん話をしてくださいます。ですから、稽古の帰りは家に帰つても寝られないです。まず、一日にあつたことを全部整理します。先生の前でメモする人はいないので。メモするということは後で忘れてもいいからメモするわけです。だから誰もメモをしません。その場で覚えるという姿勢そのもので行くのです。中国の図書の名前も人名も音で覚えるしかない。家に帰って本をめくつてあの時代の話をしてこの人物が出てきたからたぶんこの人の名前だなとわかります。そうして整理してから寝るのです。それで本当に勉強させていただきました。私のスケジュールはすべて先生の家にいつ行くのかということで動いていました」。

西川先生が始めた『書品』という学術雑誌があり、一九四九年から三百号まで続いた。二六〇号

日展の書でなければ出会えない感動

新井さんが若い人へ送るメッセージとしては、「自分の力を付けるためには、テーマを決めて日展に通うことが一番です。日展でなければ見ることに、感じることにできないものがあつたからです。今日でもそうですが、質の高さだけでなく、そこで本当に学べるもの、日展でなければ出会えない感動があるわけです。勉強するのにこれ以上の場所はないと思います」。

命の断層を書く

作品を仕上げるのに、どのような手順を踏むのだろうか。「書を書くときに、『幻影』を頭に描きます。簡単にいえばイメージです。段々それが膨らんで題材や素材、文字、古い書体が一致してきて書きたいものが目の中に見え出してくる。その時が勝負で、さあ書くとなるのです。場合によっては一、二カ月かかります。文字や書体から作品をイメージすることもあれば、逆にイメージが先で文字を選ぶこともある。いろいろなものを調べているうちにまた幻が消えて新たな幻影が生まれることもあるのです」。

『命の断層』という言葉を使います。つまり、今生きている瞬間を書くわけです。書で最大の特徴は一回性ということです。直しがききません。線の命と存在感。一本の線があつて、数文字あつてその数文字が全体になります。基本は線が一本一本大事なので、それを全力で書くということになります。ですから、書は命と存在感が大事な部分だと思います」。

西田眞人

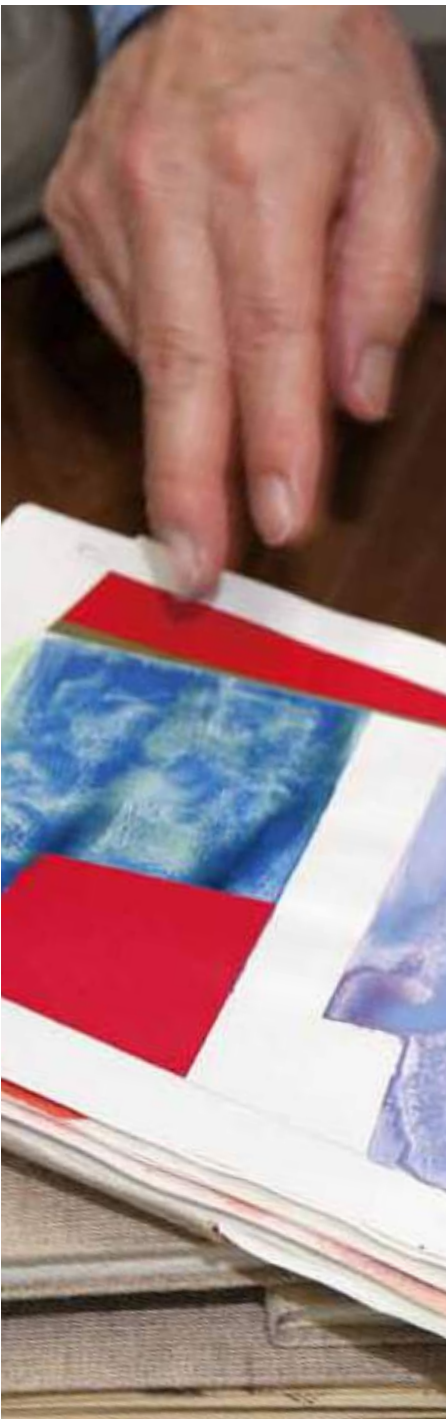
新神戸からバスで二十分ほど、閑静な新興住宅地にあるアトリエへ伺った。日本画家西田眞人さんは神戸に生まれ育ち、東山魁夷や小磯良平を輩出した県立兵庫高校を経て京都市立芸術大学へ進む。卒業後は高校の美術教師を務める傍ら日本画を描き続け、その後母校の大学で教授職を務め、本年三月退任された。これまで神戸の風景を多く描く一方、イギリスの風景も手がけ、近年は抽象との融合を図っている。好きな中国の作品を自ら模写したという絵の前で、これまでの軌跡と日展に対する思いなどを語っていただいた。

東山魁夷や小磯良平作品を間近に見た
兵庫高校時代

西田さんが育った戦後は「日本が経済的に登り坂で自国の文化に自信を取り戻してきた頃。日本画はある意味で花形的な存在でした」。各県に次々と美術館が建設された時代でもあった。出身の兵庫高校の図書館や校長室には手が届く場所に東山魁夷や小磯良平の本物の作品があった。横溝正史や妹尾河童、日展副理事長の井茂圭洞先生他、現日展会員の中にも卒業生がいる。こうした身近に芸術文化を感じることのできる環境から、美術系の学校に進みたいと思うようになった。しかし、実際に入るのは難しかったという。

浪人が決まり、卒業の三月に初めて、改組第一回の日展を大阪に見に行った。土屋禮一先生の特選「水たまり」などが印象に残り、日展はごく自然に自分の中に一つの権威として入っていた。

最初は油絵を描いていたが、次第に日本画への想いが募っていき、やがて京都市立芸術大学に入学した。「京都は保守的な様で革新的な町で、大



学の専攻は美術科として七十人取って半年間いろいろな体験をした後、一回生の後期から自分の志望に分かれます。高校の図書室で見た東山先生の作品、日展で見た日本画のマットな感じや清潔で繊細な仕事が自分の性質にあっていると感じたのです」。日本画を勉強するなら、京都画壇といわれる通り、多くの著名な日本画家が住む京都で勉強する事は最適に思われた。そして、自然に日展を目指した。

高校教員と日展出品

四回生の時に日展に初挑戦するが落選。大学院も落ち、落胆の日々を送る。しかし私学の高等学校と小学校の話が決まり、とりあえず高校教員を始めた。

しかし、高校教員をしながらの制作は厳しく、担任を持つとその職責も重く、一方日展も落選という辛い時期が続き、教師としても作家としても中

途半端だったと振り返る。日展は諦めて、個展を発表の機会にしようと、じっくり写生に集中することにします。学校から帰ると夕食後に二時間ほど仮眠をとり、十一時から三時まで描くという生活を送った。

三十八歳で初入選

「日春展には何回か入選していて、画商さんが小品を見て気に入って、日展系の作家の企画展にいらしてくださいました。それで本展に入選していませんと格好悪いと思い、十三年目の秋に久しぶりに出して初入選しました」。一九九〇年、三十八歳の時だった。藁葺き屋根の民家を描いた「廃屋」である。初めは田舎の風景を描くのに抵抗があったが、神戸市北区へ引っ越して、よく写生をするようになった。それまでは父親が鉄工所を経営していた影響で、鉄くずや錆びた工場を描くことも多かったという。また、「絵を描くことが好きなんだ」と悟り、



染まる街 2000年

変な欲がなくなったら結果が良くなったとも振り返る。好きなことを続けたいという一心であった。大学卒業時に恩師の山岸純先生から「絵を描かなくてもいいから毎日絵の前に座るようにしなさい」と言われたことはずっと心に残っていたという。学生の時は解らなくても、時間が経ち様々な経験を通して解ってくることがある。岩倉寿先生が言葉少なく言われた厳しい言葉も何かのときにふと思い出されるのだ。

青塔社で学ぶ。 震災の街を描いて特選

その後、初入選の縁で、大阪の日展の集まりに落選者も含めて呼んでもらい、東京から陳列指導にいらした先生を囲み、お話を伺う会が続いた。そこで村居正之先生と縁ができ、青塔社に入ることを薦められ、月に一度研究会に参加するように

なった。「それまで一人でやっていたことの視野の狭さややり方の幅の狭さを自覚して、塾へ入っていただいていろいろなことに開眼し、良かったです」。

その後は、生まれ故郷の神戸の風景を、端正で透明感あふれる画風で描き続けたが、また大きな転機が訪れた。

神戸で震災があった一九九五年に「黒いアーケード」で特選を受賞。日頃から身近な風景を取材し描いているなかで大地震が起きた。元々廃屋や壊れたものを描いていたので、震災の光景も自然に描くことができたという。初めての個展は結局は震災がテーマになった。

その後、反対に美しい神戸を描こうと、二〇〇〇年には「染まる街」を描いた。勤めていた高校が神戸の西、山の傾斜地にあり、そこから見た神戸の町が赤く染まる光景に感銘を受け、場所を変え現代的な洛中洛外図のように、金箔も使い仕上げた。こうして、美しい神戸の街も多数描いた。前後して、フリードリッヒの絵がきっかけでストーンヘッジ等の巨石文化をテーマにしようとイギリスを訪れ、その牧歌的でミステリアスな風景に魅せられ毎年のようにスケッチに出かけるようになった。日展では二〇〇一年からは、イギリスをテーマに、ロンドンの町やエジンバラ、リバプールなどの風景を発表してきた。しかし、ある日偶然に展覧会場でお会いした岩倉先生から「いつまで写真みたいな絵を描いているのか」と言われ、かなり悩んだ時期があった。何か足りないものがあると真摯に考え、試行錯誤の制作が続いた。

京都市立芸術大学で若い人の刺激を受けて

そうして、ここ数年、西田さんの作品は画風が変わったという。

「大学に勤めるようになって、若い画学生と接するようになったら反対に自分の捕らわれていたことや自分の足りないものが見えてきました」。また、二か月ごとにパンフレットの表紙を描く仕事が入り、そこでは、絵とは違う効果を狙って抽象的な要素も入れ、季節の花を描いたりしたが、その内に抽象で遊ぼうと決めてクレパスなどで美しい色彩や形を組み合わせた作品を毎日描き、その中から表紙絵として日本画の絵の具で次々描いた。これを日展作品に取り入れた制作ができたのかと試しだしたのだ。こうして、二〇一六年の改組新第三回日展出品作「双」は日展会員賞に輝いた。大学の庭にヤマモモの木が二つ並んでいる。このふたつのフォルムの美しさに小下絵を制作している仮張りのパネルにできた絵の具の痕跡と組み合わせた作品だ。「抽象に自分の描きたいものを構成する方法を探ると制作が一層楽しくなりました」。自分の画業のなかでも折り返し点になりそうな、好きな作品であるという。

抽象的な画面に具象を入れる

二〇一七年の作品も抽象の色が濃い。月も星も厳密な形ではなく、絵具の痕跡の美しさをヒントにイギリスで見たカラニッシュにあるストーンサー



双 2016年 改組 新 第3回日展 日展会員賞

クルの遺跡の一部を合成させた。十年間勤めた大学の退任記念展のタイトル「絵事循環」の言葉は青塔社で師事する池田道夫先生から頂戴した父君池田遙邨の書である。師からの指導や学生とのやりとり、大学の環境、過去にイギリスで見てきたものや、たまたま始めた抽象などが自身の制作の中で上手く循環しだしたと振り返る。

今年の日展も、抽象的な痕跡で気に入っているものに、どのようなものを入れていくか。しかも、自分の心が動いたものを入れていきたいと考えている。ひとつの候補はイギリスでみつけたナナカマドという赤い実のなる木である。そばに小川があ



せいや 2017年 改組 新 第4回日展

り、木とせせらぎを抽象的な画面に入れたいたいと思っている。「それを描くのが楽しみです」。西田さんの表情は明るい。

現在取り組んでいるもう一つの大きな仕事がある。「一の宮」という全国に二〇一社ある格式の高い神社をテーマに描く仕事である。現在三十点が完成し、十月には中間発表として展覧会を行う予定だ。二〇一点を完成させるまで、長い道のりが続く。

若い人を取り込む工夫が急務

日展で活躍し、長年日展を見続けてきた西田

さんの日展に対する思いは深い。これからの日展に若い人を取り込むことが絶対急務で、若い人を引きつける具体的な仕掛けが必要ではないかと話す。「せっかく五科あるので、平面や立体が一緒の空間にあってもよく、ダイジェスト版の部屋が二、三室あっても良いのではないだろうか」。さまざまな世代の作家で五科あることを見せる部屋である。現代美術はいろいろなものが混在しているのでそうした展示の部屋もあり、その後、興味を持った科をゆっくり見てみようという流れにもなるのではないかと語る。

また、以前は日展で特選を取るとデパートで特選作家の展覧会があるなど、作家に次のチャンスに繋がる企画などもあった。しかし現在、そうした企画は無い。高額の賞金が出たり、メディアで派手に発信されるコンクールに若い人の目が向いてしまふ。現在は多くの選択肢があり、環境や価値観も大きく変化してきている。「今アニメが流行って

いますが、日展作品を見たら、フライングアートとアニメの違いのようなものは鑑賞眼がない者なりに感じるものがあるでしょう。コマを追う薄っぺらな絵ではなくて、一点見ただけでぐっと迫ってくる深さ、そうした魅力がわかるには少し時間がかかります。全ての鑑賞者に迎合する必要はありませんが、色々な価値観を許容できる日展であって欲しいとは思っています。若い人に願うことは、日展になかなか入選しないからと、すぐに結論は出さずに、入選、入賞を目指し食らい付き、色々ある発表の場のひとつのチャネルとして利用して欲しいです」。公募展のいいところは毎年チャレンジできるところだ。しかも日展では他の作品を目当てに来た人にも見てもらえる。「中途半端な個展よりは多くの人に見ていただけます。出品料や搬入運送費がかかりますが、結局個展をする経費よりも安いのでは。自分の成長を確認する客観的な存在として活用して欲しいです。広報的には会場にS

Profile 西田 真人

1952年、神戸市生まれ。1978年、京都市立芸術大学日本画科卒業。1990年、第22回日展初入選。1993年、青塔社に入塾。池田道夫に師事。1995年、第27回日展で「黒いアーケード」が特選受賞。文化庁買い上げになる。1997年、個展「神戸 光 祈り」を神戸・東京・京都で開催。山種美術館賞優秀賞受賞。兵庫県芸術奨励賞受賞。1998年、第30回日展で「静まる刻」が特選受賞。2000年、神戸市文化奨励賞受賞。2001年、個展「神戸 時 輝き」神戸・東京で開催。2003(08, 13)年、日展審査員。2006年、菅橋彦大賞展大賞受賞。2007年、兵庫県文化賞。2008年、神戸市文化賞。

田中里奈

子どもの頃に棟方志功の展覧会を見たこと、そして年賀状を木版画で作る
ことよって、木版画の魅力にはまった田中里奈さん。日展ではダイナミック
な構図と表情豊かな線の表現、モダンな色彩感覚が高く評価されている。現
在は制作だけに集中するため、木版画教室で教えることをしながら自身の
制作に励む毎日を過ごしている。美大を卒業したわけではなく、独学で木版
画の技法を学んできた田中さんにとって、恩師をはじめ、日展の先輩作家た
ちのアドバイスがとても重要と語る。



「版木」

制作の道に専念する

昨年、二度目となる特選を受賞した田中里奈さん。受賞作「Meal（食卓）」は版画の伝統の良さと現代性を兼ねそなえ個性的、ものを単純化した大胆な画面構成が高く評価された。木版画教室で生徒さんたちに教えながら、日々、自身の制作に励んでいる。幼い頃から工作が好きで、段ボールを使って様々な形を作ったりしていたという。小学生の時に年賀状を木版画で作り、その魅力に

はまった。また、両親がよく展覧会につれていくてくれたそうで、その時に出会った棟方志功の作品にも大きな影響を受けた。

中学生の頃、高校進学について悩んでいたときに、担任の先生から東光会の佐藤哲氏が美術を教えている厚木南高校（当時）のことを聞き、迷わずその高校に進学した。「高校生の頃は美術部に入っていました。部員は私一人でした。実際に高校生の頃は佐藤先生との接点はあまりなかったの

ですが、卒業してこの道でやっていきたいと決めるから、放課後に作品を持って行って見ていただいたり、ご指導いただくようになりました」。当初、大学に進学し、並行して制作を続けていこうと考えていたそうだが、一浪した時に厚木市の展覧会に出品した作品が賞を受賞した。「木版画を制作していて、その時に初めて賞をいただきました。最初は一般の大学に通いながら制作もできると考えていたのですが、私は二つ同時に何かをやるのが苦手なので、思い切って大学受験はやめました。両親は大反対でしたが、これからは自分の力で生活し、作品を作っていくと宣言してしまった手前、美術大学に進学することも金銭的に難しい。それでそこまで学費も高額ではなかったセツモードセミナーに入学しました。でもそこはファッション系の学校だったので、自分のやりたいことは方向性が違っていて途中で退学し、それ以来、佐藤哲先生に指導を受けながら現在まで制作を続けています」。佐藤氏からはおもに構図などのアドバイスを受けているが、木版画の技法などについては図書館で技法書を読んだりすることで独自に学んだ。

木版画を選んだのはしぜんのこと

木版画を選んだことについて田中さんは「年賀状を作っていて道具がそろっていたということもありましたが、木や和紙など、自然のものがやっぱり好きなんです。版画の彫る作業は工的な部分があつて、絵を描くよりも自分には合っていたようです。版画の場合、摺って紙を持ち上げるまではどうなっているのかが分かりません。そして版木と刷り上がりは左右が反転します。そういう部分も面白いです。木版画を選んだのは本当に自分にとってはしぜんなこと、悩むことはなかったです」と語る。田中さんは制作にあたって、まず岩彩などを使って和紙にマチエールを作る。自宅で制作しているためスペースの都合もあり、100号の作品の場合には四枚の版木にわけてそれぞれ絵柄を彫る。摺る段階でその四枚の版木をずれないようにしっかりと固定し、マチエールを既に作った一枚の和紙を重ね、画面上部から少しずつ摺っていく。「大作の場合、最初はうまくいっていても、途中でずれてしまったりすると一枚の紙なので全てご破算になってしまいます。だから一気に摺ってしまわないとだめなんです。また摺っていると紙が縮んだり、絵具が版木に吸収されすぎて紙に写らなくなったりと、いろいろとややこしいことも多いですが、そういうことをなんとか克服できるように工夫しながら制作しています」。使用する色については、黒い部分は墨汁のそのままの色を使っているが、それ以外の色に関してはほとんどが混色だという。そのた



「Meal(食卓)」2017年 改組 新 第4回日展 特選受賞

め途中で色がなくなると、同じ色を再現することが難しいのでいちからやり直さなければならぬ。摺る前には大量に色を作っておくそうだ。摺り上げた後には多少、絵具をドリップングしたり、筆

を入れて完成させる。木版画の場合、彫刻刀の種類によつて、鋭い線を表現するには三角刀を、やわらかい線には丸刀のように、道具を変えることで様々な表現が可能になる。「版木は、彫ってしまう

と、例えば油絵のように重ね塗りをして修正することができません。失敗したら彫り直しになってしまいます。そのためできるだけ下描きはきちんと描いておくように気をつけています」。展示にあたっては、作品の表面をそのまま見せるようにしている。「アクリル板をはめてしまうと、光ってよく見えません。なのでできるだけ表面の質感などがきちんと見ていただく方に伝わるようにとアクリル



「凝視」2016年 改組 新 第3回日展出品作品

を入れないで発表しています」。モチーフについては、映画などからイメージネーションを受けることもあるという。「それから喫茶店で、たまたま見かけた人の姿が格好良くて印象に残ったり。そして昔からそうなんですが、晴れた日の雲を見ていると、だんだんと何かの形に見えてくるんです。面白い形が思い浮かんだら、忘れないようにすぐに描き止めておくようにしています」。制作中に関して、版木を彫る時は作業するだけなので、アップテンポな曲をかけてエンジンをかけるといふ。「でも摺る時と下図を作る時には気が散ってしまうので、音楽はいつさいかけません。最近、気がついたのですが、下図を制作する時には、国会中継を流していることが多かったんです。聞いているわけではないのですが、なぜかは自分でもよくわかっていません。内容はほとんど意識していないのですが、あの一生懸命に難しいことを言っている声の感じで集中できるんです」。

抽象的な作品から ものをみて描くことへの転換

日展に初めて出品したのは二〇〇四年で、翌年には初入選を果たしている。その後、日展への出品を続けているが、一度、落選したことがあった。「初出品の時に落選し、その後もう一度、落選したことがあります。二度目の落選の時には、色々と考えました。その時に、落選した時はチャンスだと思ったほうが良いという先輩のアドバイスもあって、それまではわりと抽象的な作品だったのですが、ものを見て制作するやり方に変えました。今も富士山などに写生に行って、その現場で油絵具とナイフを使って描きます。現場だと自然そのものが大きいので、それに負けないようにするにはおとなしくふわっと描いているのではダメなんです。負けてしまいそうで。だからけっこう大胆な描き方ができます。やはり現場には室内では味わえないものがあります」。

抽象から具象への方向転換にあたっては、恩師佐藤氏の言葉も大きい。「『そうやって抽象ばかりやっている、どこかで行き詰まるから、やはりデッサンをしたほうが良い』とアドバイスして頂きました。それで当時、興味があつたのが動物だったので動物園に通い、よく観察してスケッチして制作したのが『動物シリーズ』です。二〇一一年くらいからそうやって『動物シリーズ』を作るようになりました」。その結果、二〇一四年には「動物シリーズ」で特選を、さらに二〇一七年には新しいテー

マとして女性と食べ物のモチーフを組み合わせた「食卓シリーズ」の作品でも特選を受賞した。

日展に出品する魅力

恩師のアドバイスだけではなく、日展に出品していると自分の所属する下部団体の垣根をこえて、プロの画家たちからの確かなアドバイスを受けられることも若い作家たちにとっては大きなメリットと言える。

「先生方との出会いは大きいです。普段はお話しできないような先生方とお話しすることもできます。昔はわりと日本の伝統的な渋い色が好きだったのですが、顧問の先生から、こういった落ち着いた色の中に、ポップな色があると映えるよというアドバイスを頂いて、自分のなかでもすごく納得する部分が大きかったです。私の場合は美術学校に

Profile 田中 里奈

1981年、神奈川県生まれ。2005年、日展初入選。2008年、東光展損保ジャパン美術団体奨励賞。2010年、東光展会員賞。2014年、日展特選。2017年、日展特選。現在、東光会常任審査員。木版・水彩画教室「彩彫会」主宰。



も行っていないので、そういう意見をいただける場というのは本当に貴重です。先生方のご意見はやはりとても鋭いので、すごくためになります。それから日展の魅力といえば、私にとっては五科あるということが大きいです。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書まですべてのジャンルがそろった団体というのは他にはないですよ。自分は洋画に出品していますが、日展の会期中には工芸美術や書など他の科の先生方の作品を拝見しとても勉強になり、刺激を受けています」。

新しいステップに向かって

今後の制作について、削ぎ落とすことを少し考へ始めているそうだ。「最近はそのを増やさないで、もつとシンプルに出来ないかなと思っています。たとえば背景はすべて黒で潰してしまつて、人を二人く

らい入れるだけにする。それでもっとインパクトを持った作品が作れないかと思ったりもします。今は物を入れて説明しているという感じなので、そうではないものができないかと思っています。もしかしたらそういうことは、自分のキャリアからするとまだ早いかもしれませんが、ちょっと冒険してみたいという気持ちがあります。構図を意識せずにとやってきたので、それを少し無視して、失敗してもいいから、やってみたほうがいいかなと考えているんです」。二度の特選受賞を経て注目される新鋭は、ひとつの型にとどまることなく、また新たな展開を目指して次のステップに進もうとしている。

岡本和弘

愛知県豊橋市に木彫スタジオを構える岡本和弘さん。日展や日彫展の作品制作に加え、神社からの奉納物の依頼制作や地域の人々を対象とした木彫り教室などを行っている。高校卒業後、伝統工芸である井波彫刻の工房に住み込みで弟子入りし、欄間・獅子頭・仏像彫刻などの制作を行い技を磨いた。楠の良い香りが漂う岡本さんのスタジオを訪ね、彫刻との出会いや制作について話を伺った。

高校卒業後、伝統工芸の
井波彫刻の工房へ弟子入り

工業高校で建築を学んでいた岡本さんは、もとも彫刻の道へ進むとは考えていなかったそうだ。「高校時代に、自分がなんとなく生きていくという感じがしていて、卒業後はなにか厳しいことをしたいと思ったんです。最初はお坊さんになりたいと親に言ったところ、それだけはやめてくれと言われ断念しました。それで高校では建築科に通っていたので、木を使って何か修行できることはないかと探し、木彫の工房で住み込みで修業しようと思ったわけです。最初は地元から近い岐阜県高山の、一位一刀彫の工房を訪ね、住み込みで修業させてもらえるように直談判したのですが全て断られました。その時にちらっと見た旅行雑誌の片隅に高山の伝統工芸の記事があって、翌週にはすぐに富山に向かいました」。

抜群の行動力を発揮して、富山に向かった岡本さん。今度は最初に伝統工芸士を育成する訓練校を訪ね、そこで日展に出品していた大野晃一氏



を親方として紹介された。当時はバブルがはじけたとは言え、まだその好景気の影響も色濃く残り、作業場も若手の人材を欲していたという。運良く大野氏の弟子として住み込みで修業することが出来るようになった。「冬は毎朝の日課が雪かきという雪深いところでした。すぐに制作することはできないので、まずは刃物を研ぐことなど下働きとして手伝うことから始めました。その後、仏像や、欄間、だんじりのような祭り屋台や置物な

どの伝統工芸品を作りました。修業の年季は五年で明けるのですが、次の一年はお礼奉公、僕の場合はいもう一年、計七年ほどそこで修業しました」。

師のすすめで日展へ出品

師の大野氏は、井波彫刻の制作で生計を立てるとともに、毎年、日展や日彫展へも出品していた。そのため、他の工房とは異なり、大野氏の工房

で修業する弟子達は、伝統工芸の技を学ぶだけでなく、展覧会に出品する作品の石膏取りなど下働きを手伝い、しげんと展覧会に出品する作品を制作するための知識も身に付けていった。「親方はよく、日曜日は自分の作品を作るための休みだと言っていました。でも当時の僕らからすれば、それは休みではなくて、ずっと仕事しているということ。他の工房のお弟子さんと話していても、僕のところは厳しいなあと言われていました。でもそういう厳しいことがあったからこそ、今もやっていけている。当時の七年間よりも厳しいことはそうそう無いですから。それに基礎も全部、食べるための技術を学ばせてもらい、なんとか彫刻をやることで生活できるまでにしてもらったことは、本当にありがたいと思っています」。

そして修業の最後の年、岡本さんは、親方のすすめもあって日展に作品を出品することにした。粘土で作った作品だったが、見事、初入選を飾る。そして修業を終えて愛知に自身のスタジオを構えた岡本さんだが、何から何まで一人でもかなわなければならず、その生活になれるのが精一杯。日展には出品していたが、入選することができなかった。「一人で何もかもやらなければいけなくて、慣れないし、本当にたいへんでした。それで何度か落選が続いて、もう出品するのを辞めようと思ったのですが、最後にもう一度、記念の意味もあって木彫作品を出品しました。その作品がおかげさまで入選したんです」。それ以降、何度か落選があったものの、現在までコンスタントに木彫で日展へ出品を続けている。

伝統工芸品としての木彫と、日展や日彫展へ発表するための木彫と、どういった違いがあるのかを岡本さんに尋ねてみた。

「普通に仕事をしていると、基本的にはお客さんが喜ぶように考えますよね。それを続けていると、たまには自分の思いだけで作りたいという気持ちのようなことを言っていたなと思います。そうすると自分がきちんと育ってきたというか、なんとなく学んできたものが無駄になっていないなと思うようになりました」。

日展に初めて出品した時を振り返って岡本さんは「やっぱり凄くて圧倒されました。場違いなところに来た感じもしました」と率直に語る。「でも今は日展に出品することに対して魅力を感じています。同じ人体表現を模索する作家も沢山います。様々な方法論で制作されていて勉強になりますし、視野が広がります。また、個展などだけで作品を発表していると、見て下さる方は限られていて、だんだんと縮小傾向になるような気がします。日展の場合は日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書とジャンルが多く、見に来て下さる方も彫刻が好きの方ばかりではない。そういう方に一瞬でもいいから振り向いてもらえるような作品を作りたいです。すよね。そこには共有もあるし、反発もあるかもしれない。小石でもいいのでぎわつかせたい、波紋を立てさせたいというか、ほんのちよつとでも心を動かすようなことができたと思っています」。



「綾」2016年 改組 新 第3回日展 特選受賞



Profile 岡本 和弘

1975年、愛知県生まれ。高校卒業後、大野晃一に師事し伝統工芸井波彫刻を学ぶ。2000年、独立し、愛知県豊橋市にスタジオ575設立。2004年、日本彫刻会会友推挙。2010年、日本彫刻会会員推挙。日展、日彫展に出品するほか、グループ展等にも出品。【受賞】日展中日賞、特選。日彫展東海テレビ賞、中日賞、愛知県知事賞、日彫賞。GAM展読売新聞社賞、文部科学大臣賞。

木というもとから『在る』ものを素材にすること

楠の香りが心地よい岡本さんのスタジオには、これまで日展や日彫展に発表した作品もあれば、現在制作中の仏像などもおかれている。その制作中の木彫の前には、ほぼ同じ大きさの粘土の像がある。この粘土の像は、木彫を制作するにあたって、必ず作る原型だそうだ。

「粘土の原型があれば、奥行きを考えることもしなくていいですし、それを木に写せばすむ。もちろん図面を作る方もいますが、僕はあまり絵が得意では無いので、粘土で作ってしまったほうが早いんです。日展などの出品作も、最初の頃は二分の一



くらいのサイズの原型を作って、マス目をきって、それを写していました。今はもつと簡略化してマス目をきるまではしませんが、やはり原型は作ります」。粘土とは異なる木の魅力について尋ねると、

「木彫はそもそも木という存在しているものを加工します。彫刻は『在る』ということの芸術なので、もともと木という『在る』ものを素材にする彫刻は、それだけで力を持っています。もしかしたら木におうかがいを立てながら制作しているという言い方が近いかもしれません。僕にとつて、制作者よりもすでに『在る』木というもののほうが上位なんです。『在る』ものだからこそ、こちらの言うことを素直に聞いてはくれません。だから面白いし、それは直彫りだからこそできることです。



「topology」2017年 改組 新 第4回日展

それから粘土と違って、木は一度削ると完全に無くなる引き算の制作です。だから緊張感があつて、作る時に明確なイメージが木の中にあると思っていないと迷子になってしまいます」。

岡本さんの作品制作はまず本を読んだり映画を観たりすることから始まる。目を通すものには、科学雑誌もあれば美術書もあり、ビジネス書、恋愛小説などジャンルを限定することはない。その段階で印象に残った良い言葉をノートに書き留めておき、取り上げるべき要素を練り、自分の中でストーリーを作っていく。そうすることで明確なイメージを彫る前に完成させるわけだ。「日展などに出品すると、自分がいかにものを知らないかを実感します。大学などで美術専門の教育を受けてき

たわけではないので、それは今も自分のなかのコンプレックスとしてあります。だから様々な情報を収集するアンテナを張って、違う方向からきちんと埋めていかなくはないといけないと思っています」。

こうしたイメージを明確に作り上げる作業を経ることで、岡本さんはモデルをほとんど使うことなく作品を仕上げていく。どうしても分からない部分が増えてきた時だけ、実際の人間の体の動きを見るところ。修業の頃から現在まで、膨大な量の仏像彫刻などを作り上げ、徹底した基礎を身に付けた岡本さんだからこそできることなのだろう。

これからの目指すところと、若い作家たちへのメッセージ

岡本さんの場合、いわゆる西洋伝来のアカデミックな教育とは異なるスタンスから制作が始まっ

ている。もともと日本には原始時代の土偶や埴輪をはじめとして、神事に使用される仮面や信仰の対象としての仏像など、独自の彫刻の伝統がある。そこに明治十年代になって西洋の彫刻表現が流入した。それからすでに百四十年が経つ。

「伝統工芸がなぜ今に残っているかを考えると、それぞれの時代に職人達が少しずつ変化させてきたからこそでしょう。彼らの中にはその当時の現代に対応する伝統工芸品を作るという思いが基本にあつたと思います。今は特に世の中の流れが速すぎるので、最先端ではなくてもいいけどスタンダードも緩やかに変化していかないと。今は西洋彫刻が入ってからすでに長い年月が経っている、その概念とは少し離れて、もつと消化するというか、日本人が作る彫刻という概念であらためて作品を作っていかなければいけない時期になつていと感じています」。岡本さんのベースに

ある伝統的な木彫技術と、現代の作家としての思いを兼ね備えた作品は、オーソドックスで新しい、現代の日本の彫刻表現のひとつの大きな可能性を持っている。

最後に若い作家に向けてアドバイスを聞いた。「一緒にグループ展などに参加している若い人たちを見ると、やりたいことに対してのアプローチの仕方が一足飛びにゴールを目指しているように見えます。作家はやはり夢想家ではないので、残酷なまでの冷徹した目を持つもう一人の自分がいないといけない。思いが強すぎると暑苦しくなるし、作品としての破綻が出来てしまう。他人に厳しいことをいわれるとへこみますけど、厳しい自分に言われるのであれば、心が折れませんしね(笑)」

上原利丸

上原利丸さんは、オリジナルの友禪染の技法で作品を制作する染色家だ。色鮮やかな色彩と、モダンで洗練されたデザイン感覚を兼ね備えた作品は、自然の広がりや伸びやかさが感じられ、伝統的な技や美意識をもとにした現代の新しい美術作品の魅力を示唆してくれる。現在は大学で教鞭を執りながら、若い作家たちの育成にも力を尽くし、また2016年には文楽の衣装制作を手がけるなど、新たな試みにも積極的に取り組んでいる。さいたま市にある工房を訪ね、実演も拝見しながら話を伺った。



技法と自分の性格がかみ合う

鹿児島で生まれ育った上原さんは、大学受験のために上京し、二浪の上、東京藝術大学工芸科に入学した。公務員で土木設計士だった父親は大工仕事が好きで、また兼業農家だった祖父は地元で有名な腕の良い左官だった。ものを作ることに幼い頃から親しんでいた環境といえるだろう。大学では一、二年目に工芸の様々なジャンルを学んだ

後、三年目に専門の分野を選ぶことになる。「染色を選んだのは色が使えらるということが大きいです。他の工芸の分野はあまり色が使えませんが。染色の中でも友禪は特に自由に色を使える世界なので、魅力を感じました。具体的にどういう作品を作るのか、その時点ではつきりとイメージできていたわけではありません。僕らの頃は現代美術が流行っていて、染色といっても工芸というより美術という意識が強くなりました。当時、海外の芸術祭で

はファイバーワークの巨大な作品が展示されたりもしていました。

染色を教わった当初はすぐにうまくはできず、最初は間違った道に来てしまったのではないかと戸惑うこともありました。でも四年生になった時に、後に人間国宝になられた山田貢先生が友禪を教えにいられていて、糊置きなどをされている様子を見た時に、これはかっこいいと思ったんです。初めて自分の性格と技法がかみ合いそうだという気がしました。それから、ずっと友禪の制作を続けています」。取材の合間に下絵の描線を糊で象つていく「糸目糊置き」の作業を実践していたが、渋紙で作られた円錐形の糊筒を絶妙な手加減で押しながら下描きの線をスイスイなぞっていく上原さんの姿は、いかにも楽しそうで、無心の世界に心を遊ばせているように見えた。上原さんご自身が語る「自分の性格と技法がかみ合う」ということが、まさにその通りだと実感した。

学部を卒業後は大学院に進み、その頃に恩師の中村光哉氏の仕事を手伝うようになった。中村氏の調布のアトリエに半分、住み込みのような形

で通い、その中で実際の技術とともに、日展や現代工芸展の作品のようなアートとしての友禪や文化財保護といった観点などに触れることができた。また東京藝術大学の染織研究室で助手として勤務した後、新設の文星芸術大学に教授で美術学部長の中村氏とともに教員として就任し、そこでも様々な話を聞くという貴重な経験をした。

身近なモチーフで作品を作る

日展に出品するようになったのは大学在学中のこと。しばらく出品を続けていたが、三十代半ばから四十代の初めくらいまで、日展から離れていた時期がある。「藝大には染色以外でも日展の先生方が多かったので、どうしても図

の作り方とか、一つの特徴が、あるといえはありました。そうすると、作者側としてはかなり違うと思っ

ていても、見る人にすれば、技法の違いはあっても、どうしても似たような作品だと感じられてしまうのです。僕はなんとか自分の世界を作りたいてと考えるようになって、ある時すごく素直に作ろうと思いました。そういう中で生まれたのが子どもシリーズや公園シリーズです。ちょうどその頃に子どもが生まれたこともあって、身近なモチーフとして作りたくなりました。そうい



新しき気持ちに染まる 2007年 第39回日展 特選受賞



卯・情報リテラシーに染まる 2011年 第43回日展

いうこと、そして深く染料が染みこんでいくところ、それを組み合わせることで、染色の美術的な意味が高まっていくのではないかということから不定形の作品を作れないか模索するようになりました。当時、染色作品でそういったものは無くて、大袈裟に言うところ、自分のオリジナルを作ることができた、それで日展にもあらためて出品してみようと思うようになりました」。

新たに生み出された不定形の作品を日展に発表すると反応は様々で、上原さんの作品だと認識されないこともあったという。でもその反応に対して、逆に上原さんは「そこまでいったらこっちのもんだなど、それができたことは大きかった」と語る。

自分の世界を生み出すことについて、上原さんは

Profile 上原 利丸

1955年、鹿児島県生まれ。1978年、安宅賞受賞。1980年、日本現代工芸美術展、日展初入選。1981年、東京藝術大学大学院修了。個展などでの発表を経て1999年、日本現代工芸美術展、日展へあらためて出品をはじめ。日本現代工芸美術展、1999年、本会員賞、2001年、NHK会長賞。2007・2013年、日展特選。2016年、文楽パリ公演衣装制作（カルティエ現代美術館・パリ）。岡田茂吉賞展や文星芸術大学選抜展（ニューヨーク）、宇都宮市民芸術祭20周年記念展（招待）、前進する工芸展などへの出品のほか、グループ展、個展多数。現在、東京藝術大学教授、文星芸術大学特任教授、現代工芸美術家協会本会員、日展会員。



の衣装には刺繍が施されスポットライトが当たることで光輝く存在感をみせる。友禅という染色だけの衣装だとどうしても舞台上で抵抗感を出すことができない。そのため日本刺繍の作家に頼んで、



文楽の衣装

金糸や銀糸を使って刺繍をしてもらった。「文楽の衣装を作ったのは初めてでしたが、とても良い経験でした。予算もあつて、なかなかふんだんに刺繍をしていただくことも難しいかと思っていたのですが、協力して下さった刺繍の方がこの企画にとっても興味を持って下さって、予定以上に豪華な衣装に仕上げることができました」。

友禅の着物は世界最高の染色品

人形のための着物は初めて手がけられたそうだが、着物についてはよく制作されているという。「着物は普段、作っていますが、僕はつくづく友禅の着物は世界最高の染色品だと思います。特に友禅が作られるようになった江戸時代半ば初期のものは、本当に素晴らしい。僕は

いまだに友禅が一番輝いていた頃の着物を超えられていません。意匠性についても、社会性、機能性についてもです。着物は広げると絵になりますし、纏うと立体作品です。しかも着物を着た人間が動くわけで、これは凄いことです。今でも着物や帯を作っているのは、やはり技術を磨けるということがありますし、自分が作っているものが友禅の最盛期のものを超えたいと思うからです。当時の着物は時代に生きています。今はなかなか普段の生活の中で着物を身に着けることがないので、それがちよつと残念です」。人が身に着け、動くことによって、さらに魅力を増す友禅の着物。もっとも人間に密着した文化財と言える。生活の中で生まれ育まれた日本固有の美の世界「工芸」は、今、世界からも高く注目されている。そうした状況のなかで、上原さんの友禅は、現代に生きる友禅の幅広い魅力を伝えてくれる。

「僕のメインテーマは本友禅染めという技法の現代的で新しい表現の展開です。そういうメインテーマがあつて、モチーフは普段の自分の日常の中から持ってきます。それは、子どもシリーズの頃から今までずっと変わっていません。一昨年の日展に出品した『蜜を求めて』は自宅の庭を観察していて、椿の蜜を吸いにやってきたメジロをモチーフにしたものです。一つの画面に春夏秋冬を入れていて、牡丹や紅葉、椿などのモチーフも、庭に育っている植物です。身近なものほどじっくりと観察できますし、自分の気持ちにすんなり入ってきます。カメラをもってモチーフを探しに行くというようなことはあまり好きではありません。写真を撮ることに意識をとられて、その時の風や空気の感じをきっと忘れてしまう。そうになると本当に伝えたいものを伝えられていないのかよくわからなくなります。だから常に身近にあつて、普段の生活のなかで自然と接しているもの、そういうモチーフが自分にとっては大切です」と言う。

常に自らとの挑戦をするということ

また制作の上で重要なこととして、挑戦をあげる。「自分のなかで良い意味で挑戦していくことです。そうしていればマンネリ化しません。新しい何かを加えるともっと作品が深くなる、可能性が出てくる、そういうものを一つずつ加えていくと、ある時点でそれが大きく変わることに繋がるのではないのでしょうか」。たとえば二〇一一年に日展に発

表した作品は小さな布を正方形につなぎ合わせたものを220パーツ構成し配列したもの。これも初の挑戦だったそうだ。鮮やかなブルーと黄色が印象的な作品だが、鹿児島の実家の近くでは春になると一面に菜の花が咲くという。その黄色と青空のブルーが上原さんのライフカラーでよく使用される色で、パーツの一つ一つには無作為に抽出された平仮名が一文字ずつ書かれていて、デジタル社会の現代の混乱、情報リテラシーのイメージを組み込んだ作品になっている。

現在は東京藝術大学教授、文星芸術大学特任教授として学生たちに日々、授業を行っている。「技法や技術といった基本を教えることはできますが、表現というのは自分の中にあるものです。表現については、基本的に教えられないといったら変ですけど、自分探してみたいものなので。自分自身の経験から言えることですが、個性は自分のなかにある。それを出せば、おのずとオリジナリティは出てきます」。



蜜を求めて 2016年 改組 新 第3回日展

文楽の衣装を友禅で制作

常に新しいものに挑戦しながら制作を行う上原さんだが、二〇一六年には文楽の衣装制作も手がけた。トータルプロデュースをレディー・ガガの靴でよく知られるようになった館鼻則孝さんが手がけ、人形遣いの三世桐竹勘十郎さんが出演した。「壇浦兜軍記」の「阿古屋の談」をテーマにした演出では、花魁が演奏する三つの楽器が衣装のモチーフとして使用されている。また兜軍記は平氏と源氏の戦いをテーマにした話。平知盛が敗れて碇を体に巻き付けて沈むというエピソードからは大きな碇を、安徳天皇が入水する時に一緒に沈んだと言われる宝剣など、物語に登場する様々なモチーフが図柄に取り入れられている。文楽は、暗い会場のなかにスポットを当てて上演される。通常の文楽

伊藤一翔

淡路島に生まれ、小学校で褒められた習字

伊藤さんは昭和三十年、兵庫県淡路島の北端、淡路島岩屋町（現在は淡路市岩屋）に生まれた。習字との出会いは小学校の授業である。最初は普通ぐらいだった。クラスに上手な生徒がいて「どうしたら上手になれるのか。一遍ほめられてみたい」という気持ちで、町の有名な先生に習字を習った。先生は日展に一度入選したことがある人だった。上手な人のまねをして書いたところ、先生にほめられ、それからさらに練習に励み、学校の代表となって書くほどに上達した。こうしてますます書道が好きになっていった。

努力するとできるようなると
悟った高校時代

高校は明石南高校へ進んだ。淡路島から船で通ったので、波が荒れた日は休みになったという。友人を誘って書道部に入部したが、卓球部からも誘われそちらに夢中になってしまった。二年が終わり



「生（翔字を書くんだね」と書の恩師から言われた。二十二歳で、本名の「」から雅号を「翔」と決めた時である。小学校で芽生えた書への気持ちは変わることなく、大学時代には書で生きていきたいと決めた。現在「滴仙会」のトップとして多くの後進の指導にあたられている書家伊藤一翔さんのご自宅は新神戸から市営地下鉄で三十分ほど。閑静なニュータウンにあるアトリエへうかがった。

艸舟先生など著名な先生方が門下におられたが、高校を出る頃に一楽書芸会は笹波会、寒玉、一東会の三団体に発展的解散となった。

大学で出会った恩師 廣津雲仙先生

共に学んだ友人は大阪教育大学の書道専攻科へ、伊藤さんは甲南大学へと進んだ。大学では迷わず書道部へ入部。そこで、生涯を決める恩師と出会うことになる。廣津雲仙先生である。長崎の雲

仙岳のそばに育ち、戦後上京して住友化学に入社、書で関西の雄である辻本史邑先生の高弟として全国に認められていた方である。兄弟弟子に村上三島先生もいて、関西の一大派閥である日本書芸院を築いた。日展でも要職を務め日本芸術院賞を受賞された書家であった。

入部した当初は廣津先生の門下の尾崎邑鵬先生が手本を書かれたが、二年からは廣津先生が直々に書かれた。部員も三十五、六名から数年後には七十名まで増えた。書道全盛時代であった。「書道大学に入ったつもりで、一生懸命書いて書いて書きまくりました」と当時を振り返る。「雅号の一翔は、本名が一なので、最初は一でとおそうと思ったのですが先生に寂しいと言われ、大学の書道部の先輩に奥村翔鴻という方がおられ、翔の一字を頂戴してつけました」。

卒業後、墨滴会と実家の仕事を両立

四年生になった頃、先輩から誘われ、廣津先生から直接指導を受けるべく、師の門を叩いた。先



生は漢字が専門だった。年に四、五回ほど合宿があり参加した。そこで、書道で生計を立てている人がある

ことを知り、自分もそうした生活ができれば幸せだと思ったという。そう思っていた矢先、廣津先生から「卒業したら書道の本の編集をしてくれないか」と言われた。

当時、実家は淡路島の養鶏業で鶏をたくさん飼っていた。後を継ぐことを考えたこともあったが、子供の頃、身体が弱かったこともあり、できれば自分の特性を活かした仕事がしてみたいと思っていた。両親に書道の道に進みたいと伝えると母親が背中を押してくれた。父親は心配したようだが、家の手伝いもするということで了解を得て、卒業後、淡路島の実家の仕事を月の十日間、廣津先生の子息と一緒に墨滴会の編集の仕事を手伝った。あとは週に一度淡路島で子供を中心の書道教室を開いた。二、三年後には廣津先生が書道誌出版の会社を起こし、そこで働くことになる。また同じ廣津先生の弟子であった現夫人と二十六歳のときに結婚。先生には亡くなられる平成元年までご指導をいただいたという。振り返れば「廣津先生が書の原点であり、先生との出会いがなければ書道に打ち込んでいなかったのではないかと思います」と語る。

平成十二年、滴仙会を立ち上げる

その後は日展で要職を務めた林田芳園、大重筠石、毛利柳村、伊藤天游先生の四人と、子息の廣津岱雲先生で墨滴会が運営された。大きな組織で、日展や読売書法会などに多く出品していた。変わらないように少しずつ体制が変わっていく。そこで、

篆隸楷行草を書く

滴仙会の啓蒙・機関誌である「滴仙」を出すのも大きな仕事である。毎月、篆隸楷行草の手本を書き、全国から集まった作品を審査して本にし、進級などを決め、編集する。

現在、作品としては行草書で発表しているが、「今後の挑戦として、許されるならば篆書隸書楷書も発表してみたい。この作家はこんな字も書くのかといった、違う面も見せることができればと思っています」と語る。

また、伊藤さんは、これまで中国を四十回ほど訪ねた。今年も、三十年続く成田山競書大会で、日中書の交流団団長として六十名程を率いて行くという。

中国の漢詩を自ら作って書く

中国と深く関わる漢字作家の伊藤さんであるが、二年前から自作の漢詩を書いて発表している。

墨滴会の林田芳園先生が漢詩の専門で、昔から先生の元で漢詩を勉強したいと思いつながらできずに林田先生が亡くなった。先生の墓前に誓い、近



Profile 伊藤 一翔

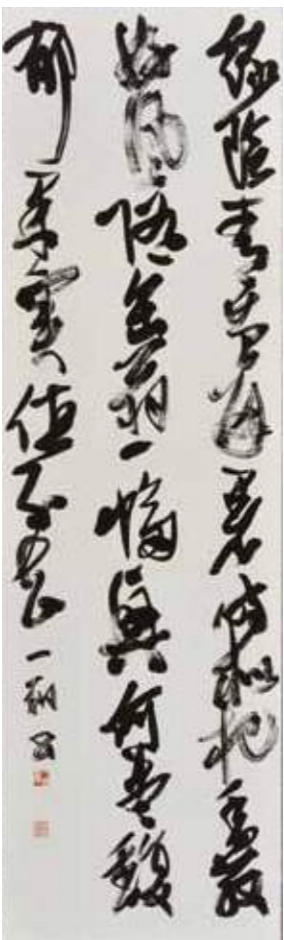
1955年、兵庫県生まれ。廣津雲仙、大重筠石・池内立明に師事。2006年、2010年、日展特選。2013年、神戸市文化賞。日展会員。日本書芸院常務理事、滴仙会理事長。



賀一松会 五十四展 2017年

近年の作品

現在、伊藤さんは日本書芸院の高校大学生展で部長を務められている。全国から二万点もの応募があるという。その表彰式で、若者の前途の希望に満ちあふれる喜びをひしひしと感じた。爽やかな気が照り輝く。若い人を今後どのようにして書道界に導くことができるのか、書を書く楽しさを持ち続けてほしいという気持ちを漢詩に込めた。



夏日看吳昌碩枇杷圖 2016年 改組新第3回日展



平成丁酉回覧全日本高校大学生展而感 2017年 改組第4回日展

吳昌碩という中国の清朝末期から近代にかけて活躍した画家が描いた枇杷の絵を見る機会があり、感動した気持ちを漢詩にした。韻部たる果実、枇杷の匂いがしてくるようなすばらしい作品で、これは今一体いくらぐらいの価値があるんだろうかといったもの。

畿漢詩連盟会長の大野修作先生の元で習うことを決めたのである。自らが書いた詩を自らの専門

の明末清初のかたちで大胆な行草書で仕上げる。

漢詩を作るには、常々何かを感じなければ、漫然と暮らしてはできない。そこで、還暦を迎えたとき、または誰かが亡くなられ悲しみにくれたときなど、節目節目にひとつふたつと作っていくという。できあがっている漢詩の場合、偏やつくりなど替えることはできないが、自分の詩なので、文字の変換は臨機応変にできるといふ。

「まず原稿をペンで下書きして、こなれやすい字なのか、縦か横か、決められたスペースのなかで決めていきます。こなれをみて漢詩を決め、何の古典をベースにするのか、どのようなくずしで書いているかなどを調べます。自己流は我臭が出る漢詩になってしまう。古典の香りがする漢詩づくりが一番

大切なですが、なかなかうまくいきませんね」

篆隸楷行草の手本を毎月書き、漢詩をつくり、年間に十数点の作品を発表し、審査も行う。伊藤さんの挑戦は続くのである。

日展とのあゆみ

日展との関わりは、小学校で習った習字の先生が日展に出していたことから始まり、高校、大学と日展作家である師と出会った。自然の流れで日展に出品し、初入選は二十五歳、大学を出て三年目だった。その後は落ちたり受かったりを繰り返し、三十歳くらいからは通るようになった。平成元年には廣津先生が亡くなられ、日展に審査員として出る先生も会にはいなかった。独立して一度だけでも出品が無理な時期があったが、二十三回入選している。

書の楽しみ方を伺った。

「一般の方に書道を体験していただける機会があるとういことだと思います。墨をするだけでも楽しいです。いい硯ですると、墨が溶けていくような感じで、薄くても濃くてもきれいな色が出ますし、すつたらよい匂いがして精神が落ち着きます。墨は膠と香料とすすを混ぜて気の遠くなる程練ってきたものですが、香りには白檀や麝香など様々な種類があります。硯にしても奥深いものがあります。その時代の名工が作った硯には何とも言えぬ風格が感じられます」

二〇一七年の新春。一松会展の記念展で書いた詩。「正月が来て、松飾りをしてお酒を酌み交わす。新春の書展も五十回を迎え、功成り名を遂げた人がたくさんいて、現在も三十数名の作家が作品を出し、よい新年の朝を寿いでいる」。唐の時代の懷素という書家の匂いを出した作品である。

その後、平成十八年二〇〇六年、第三十八回日展で特選を受賞。その時は滴仙会になっており、特選などとならないだろうと半分あきらめの境地だったという。二回目は長かかると覚悟をしていたが、四年後に特選を受賞。平成二十七年には初審査員を務めた。審査をして改めて特選という厳しき門を通過してこれたものだと実感されたという。応募数が一万点前後のなかから約二十人もの審査員の厳しい目をくぐり抜けていくのは並大抵のことではない。

文房四宝の精神を大切に

最後にこれからの書に期待することを伺った。「いまや人口減少が社会問題となり、習い事も多岐にわたっています。中心になっているのはほとん

今年、111年を迎え、日本最大級の公募団体である日展の秋の展覧会は、11月2日（金）～11月25日（日）まで、国立新美術館にて、21日間開催いたします。毎年、10月に全国から5部門（日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書）の公募作品が集まり、審査後、入選作と会員や準会員、無鑑査作品など約3,000点が一堂に会します。会期中は、講演会、シンポジウム、ギャラリートーク、ワークショップなどさまざまなイベントを予定しております。

報道関係のお問合せ

日展広報事務局
(株) IMPRESSION
安田・松井

TEL 03-6312-4098
FAX 03-6862-6727
sr@mbr.nifty.com
107-0062
東京都港区南青山2-18-20
南青山コンパウンド502

現代の日展作家たち — 日本 の 美 — 2018

平成30年8月27日発行

【企画・制作】(株) IMPRESSION

【デザイン】 高田恵子

【印刷】 (株)井上総合印刷

【編集・発行】 公益社団法人 日展

〒110-0002

東京都台東区上野桜木2-4-1

電話 03(3821)0453

http://www.nitten.or.jp/

office@nitten.jp

© 2018 NITTEN

改組 新 第5回 日展 開催概要

展覧会名

改組 新 第5回 日本美術展覧会

The 5th Reorganized New NITTEN The Japan Fine Arts Exhibition

会期

平成30年11月2日（金）～11月25日（日）

〔休館日〕 毎週火曜日

〔観覧時間〕 午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）

11月9日（金）は「日展の日」として、入場無料となります。

会場

国立新美術館 東京都港区六本木 7-22-2

東京メトロ千代田線乃木坂駅6番出口直結
都営地下鉄大江戸線六本木駅7番出口から徒歩約4分
東京メトロ日比谷線六本木駅4a出口から徒歩約5分

主催 公益社団法人 日展

後援 文化庁／東京都

一般問い合わせ

〔代表〕03-3821-0453 〔展覧会関係〕03-3823-5701

入場料	一 般	高・大学生
当日券	1,200円	700円
前売券・団体券	1,000円	500円

小・中学生は無料。団体券は20名以上。20枚購入につき招待券を1枚進呈。前売券は、チケットぴあ、ローソンチケット、CNプレイガイドほか主要プレイガイド、デパート友の会、画廊、画材店、近畿日本ツーリストなどで発売。（前売券販売期間：9月1日～11月1日）

★お得なチケット★

◆ **ペアチケット**（前売りコンピューターチケットのみ）

1枚 **1,800円**

お二人で入場の方、またはお一人で会期中2回入場いただく方にお得なチケットです（他の割引との併用はできません。販売期間は前売券と同じ）。

◆ **トワイライトチケット**（時間限定入場券・会場窓口販売）

観覧時間：午後4時～午後6時

入場料：一般300円／高・大学生200円

作品点数が多いので、部門ごとにご覧になるなど、何度も分けてご覧いただく方にもお得なチケットです。

◆ **東山魁夷展・改組 新 第5回日展前売セット券**

販売期間 9/4（火）～10/23（火） 2,200円（税込）

※詳しくは日展ホームページでご確認ください

同時開催 生誕110年 東山魁夷展 ● 2018年10/24（水）～12/3（月）

巡回展 改組 新 第5回 日展

京都、名古屋、富山、大阪、岡山

会期中のイベント

講堂でのイベント		場所:国立新美術館 3階 講堂(入場無料)		※変更となる場合があります。	
開催日	時間 ※途中10分休憩	講演会・シンポジウム・映像による作品解説等			
11/3(土・祝)	午後 1:30~3:30	洋画	今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会	今年度審査主任 今年度審査員	今年度特選受賞者 今年度新入選者
11/9(金) [日展の日]	午後 1:30~3:00	特別講演会「日展未来構想」~未来に向けての夢の提案~ 東京藝術大学 大学美術館長 練馬区美術館 館長 秋元雄史氏			
11/10(土)	午後 1:00~2:30	同時開催 生誕110年 東山魁夷展 記念講演「窓と帽子~東山魁夷の芸術を読み解く」 講師 野地耕一郎氏 ※聴講は無料です。「東山魁夷展」または「改組新 第5回日展」の鑑賞券(半券可)が必要です			
	午後 2:40~4:40	日本画	「日本画を語る」今年度審査員と受賞者・新入選者による座談会	野地耕一郎氏	今年度審査員 今年度受賞者 今年度新入選者
11/17(土)	午後 1:30~3:30	彫刻	シンポジウムによる討論会「彫刻を語る」 映像による作品解説「彫刻」	池川 直 堤 直美 桑原秀栄 長谷川倫子 永江智尚 村井良樹 清家 悟 堀内有子	
11/23(金・祝)	午後 1:30~3:30	工芸美術	シンポジウムによる討論会「日展の工芸美術」 映像による作品解説「工芸美術」	今年度審査員 今年度審査員	今年度特選受賞者
11/24(土)	午後 1:30~3:30	書	シンポジウムによる討論会「日展の書」 映像による作品解説「書」	有岡鄭崖(進行) 高木厚人 吉澤鐵之 土井汲泉 尾崎蒼石 牛窪梧十 田中徹夫 遠藤 疆	

わくわくワークショップ

実施日程	時間	部門（希望する部門を選択）		
11/4（日）	午前 10:30～	日本画	洋画	書
	午後 2:00～	彫刻	工芸美術	
11/11（日）	午前 10:30～	日本画	洋画	書
	午後 2:00～	彫刻	工芸美術	
11/18（日）	午前 10:30～	日本画	洋画	書
	午後 2:00～	彫刻	工芸美術	

※各回約2時間

★親子で記憶に残る体験をしてみませんか？

- ◆ 日展作家が直接指導します。
- ◆ 対象：小・中学生とその保護者（参加費は無料、保護者は入場券を各自ご用意ください。）
- ◆ 場所：国立新美術館 3階 講堂
- ◆ 申込受付：往復ハガキに参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門（※第2希望まで）を明記のうえ、下記までお申し込みください。申し込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。（受付締切 10/26必着）

- ◆ 受付人数：各部門10組（20名程度）
- 〔お申し込み・お問い合わせ〕 〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局・わくわくワークショップ係
（TEL.03-3823-5701）

らくらく鑑賞会

★出品作家達とゆっくり日展を鑑賞したい方に

- ◆ 開催日程 11/5（月）・12（月）・19（月）
 - ◆ 定 員：各回10～15名
 - ◆ 参加費：1名5,000円（入場料、昼食、テキスト他）
 - ◆ 時 間：10:30集合、16:10解散（昼食つき）
- 予約制（詳細は下記日展事務局までお問い合わせください。）

グループ作品解説

★平日（月～金）に15名前後の団体で 作品解説をご希望の方に

- ◆ 日展作家が会場をご案内いたします。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書のいずれか1部門をお選びいただき、約1時間で主要作品をご説明いたします。ご希望のグループは、事前にご予約ください。
- ◆ 校外学習やクラブ活動など、学校のグループにも学年や目的に応じた解説をいたしますので、ご相談ください。

ミニ解説会

会期中の 平日 開催

★一人からでも解説が受けられる

- ◆ 開催日程
改組 新 第5回日展会期中の平日（土・日・祝日・初日・11/9を除く）
午後1時30分～（30分程度）
 - ◆ 定 員：各部門20名（5部門）
- 参加費無料 各自入場券をご用意ください。 予約制（当日受付あり）

イベント予約 お申し込み・お問合せ

〒110-0002 東京都台東区上野桜木2-4-1
日展事務局・展覧会係（TEL.03-3823-5701）

